
Aria Di Mezzo Carattere Ver.FF?

y t

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A r i a D i M e z z o C a r a t t e r e V e r . F
F ?

【Nコード】

N 1 9 6 0 P

【作者名】

y t

【あらすじ】

キーストーンを手に入れ、いよいよ古代種の神殿へと向かうことになったクラウド一行。しかしゴールドソーサーの園長であるディオは、彼らの腕を見込んで、新人才ペラ歌手ガーネットの護衛を依頼する。彼女は、世界中を股に掛ける大泥棒ジタン四世に狙われていた。

FF?をベースに、?・?などのシリーズ。あとルパン三世もちよ

つとまじったパロディです。重い展開はありませんので、気楽に読んでいただければ幸いです。

前編

古代種の神殿への鍵であるキーストーンを手に入れたクラウド「ストライフ一行。いよいよ目的である神殿へと向かおうと、ゴールドソーサー敷地内にあるゴーストホテルを出る。背伸びをし、いつもの癖で空を見上げるが、ここは建物の中。それに一面が暗闇で、周囲は墓地と徹底的に悪趣味な内装を施された場所だ。何やら物足りなさを感じつつ、クラウドは仲間を見る。

バレット「ウォーレス。

眠そうな眼をこすりながら、丸太のような腕の先についたギミツクアームをさすっている。

シド「ハイウインド。

この旅には勢いで参加してしまったのだが、そこそこ楽しんでいく様子だ。朝から紫煙をくゆらせている。

レット???

やはり朝には強いのか、もう既に爽やかな表情で朝の空気を吸っている。

まだ子供とはいえ48歳にもなれば、そういった類のこともしっかりしてくるのであるうか。

ユフィ「キサラギ。

半ば無理矢理クラウドについてきた、ウータイのマテリアハンターだ。いつもクラウドのマテリアを狙っている。眠いのだろうか。

今は半開きの眼で、隙だらけだ。

ヴィンセント⇨ヴァレンタイン。

彼はいつも通り。憂いを帯びた眼でどこかを見ている。

ケット・シー

完璧な又イグルミである彼は、つい先ほど動き出した。断じて又イグルミではないと言い張る彼だったが、後ろのチャックを夜中こっそり開けてみると、ぎっしり綿が詰まっていたので嘘だろう。

ティファ⇨ロックハート。

ちらりと見たが、向こうもクラウドを見つめていたようだ。昨夜から色々話をした。彼女が今一番クラウドのことを心配しているだろう。何しろ、彼の表情はいつも冴えなかったのだから。

エアリス⇨ゲインズブル。

彼女とは…。

「おっはよお〜う!」

後ろから肩を叩かれ、クラウドは振り向く。そこには昨夜と同じような笑顔を浮かべ…いや、昨夜の彼女の笑顔は、今より少しだけ魅力的だったような気がする。あれはゴンドラの照明が見せた幻か、それともクラウドの心の中で彼女の存在が大きくなっていったのか…。「私、あなたを探してる」という言葉が反芻される。クラウドは思わず赤面してしまった。

「あ、お…おはよ」

「ふふw」

さりげないやりとりでも、何故か緊張してしまっ。そんな場面をティファは面白くなさそうに見ていた。

「なあ〜によお！ その微妙な雰囲気は〜！」

エアリスに抱き付くティファ。「何でもないわよね〜、クラウド？」こちらに振られても困る。

「あ、ああ…」

「何だか私だけ疎外感〜！」

デートは決して初めてではなかった。

彼自身、相当なルックスの持ち主であることは誰もが認めるところだ。何度か経験したデートではあったのだが、昨夜のそれは今までのものとは次元が違っていたように感じる。すっかりエアリスの雰囲気呑まれてしまって、自分は彼女についていけただけだった。主導権を一度も握れず、鼓動の赴くまま、ゴールドソーサーでの逢瀬はクラウドにとって半ば夢のようなひとときであった。

「…」

エアリスはいつも笑っている。どんな些細な不安や悲しみも感じさせない笑顔を、エアリスはみんなに振りまいてくれる。皆、つられて笑顔になる。エアリスは太陽だった。

だがしかし、クラウドは思う。「それでは、彼女の本当の気持ちは何？」と。

人間なのだ。いつも笑顔でいられる訳はない。必ずどこかに、悲しみや怒り、それ以外にも様々な負の感情は隠されている。クラウドはそれを見つけ出してあげたいと思った。昨夜ほんの一瞬だけエアリスが見せた、淋しげな笑顔。その奥には、彼女のどんな想いが

あるのだろうか。

A r i a D i M e z z o C a r a t t e r e
V e r . F F ? 前編

「さて、みんな揃ったみたいだな。そろそろ出発…」

そのときクラウドは、各スクエアに続く穴から妙な塊が飛び出したのを目撃した。

その塊は着地するや否や、猛スピードでクラウドの方へ突進してきた。

「少年ッ！！！」

「うわっっ！！？」

ゴールドソーサー総支配人、ディオだった。

昨日キーストーンを譲り受ける条件である闘技場八人抜きで散々虐められたばかりだ。もう関わりたくはない相手だった。そうでもなくても犯罪者と勘違いされ、コレルプリズンに落とされた借りもある。

これまでの付き合いから総括すれば、クラウドは可憐い良い印象を抱く理由がなかった。

「おう、ゴールドソーサーの園長じゃねえか」

シドが葉巻をくわえたまま言った。ディオは息を切らせ、がっしりとクラウドの肩を掴んだ。

「な、何ですか？ 今度は…」

「済まん！ 協力してくれ！」

「はあ？」

「今一度、少年たちの力を貸してくれ！」

「む、無茶言わないで下さい。俺たち、これから行かなきゃならないところが…」

「どうしてもダメか…それなら申し訳ないが昨日渡したキーストーンは返して…」

「あっ、キタネ！」

クラウドとディオが問答している間に、ティファが割り込む。

「まあまあ。何が起こったのか聞いて、それから決めようよクラウド」

「ト」

「…判ったよ。で？ 何があつたんですか？」

「うむ！ 実はな…」

神秘的な面持ちで、ディオは語り始めた。

…が、突然ティファの顔を驚いたような表情で眺め、固まってしまった。

「あ、あの？」
「むっつっ！！」

眼を見開き、握り拳を天に突き上げて、ディオは何かを確信した。
「これだあつ！」何が何だか、一行にはさっぱり判らない。ずかずかとティファに歩み寄り、ディオは彼女の肩を力強く掴んだ。

「協力してくれ！ 少女！」
「少女……」

意味不明な彼の勢いに吞まれ、クラウドたちはしばらくの間一言も発することが出来なかった。

×××

「紹介しよう。彼女がオペラ歌手、ガーネットさんだ」

イベントスクエアに連れて行かれ、そこでディオが紹介したのは、ティファとそっくりな美しい黒髪の少女だった。年の頃はティファよりも下だろうか。幼さの残る瞳が、驚いたようにティファを見つめた。

「驚いたなこりゃ……！ ティファにそっくりじゃねえか！」

バレットも唸る。

ガーネットと言われた少女は深々と一礼する。つられてクラウド

たちも頭を下げた。

「彼女は新進気鋭の若手オペラ歌手でな。三日後に上演されるオペラの主演を務めるのだ」

「オペラ…?」

「数百年前に書かれた、“マリアとドラクウ”という名の作品だよ」

オペラ知識に疎いクラウドは首を傾げたが、もっと腑に落ちないのは何故自分たちがそんなオペラ歌手に会わなければならないのかということだった。

ディオは突然がつくりと肩を落とし、幾分トーンの下がった声で告げた。

「昨日、こんな手紙が届いたんだ」

懐から取り出した便箋を、クラウドは受け取る。広げてみると、そこにはお世辞にも上手とは言い難い字でこう綴られていた。

おたくのガーネット。ヨメさんにするから、さらいに行くぜ。
さらいのジタン四世

「何だ？ このさらいの何とかってのは」

あからさまに胡散臭そうな顔で、クラウドはディオを見た。慌てて反論するディオ。

「ば、馬鹿な！ ジタン四世を知らないのか！ 少年！！」

「悪いけど、興味ない」

「ジタン四世…泣く子も黙る稀代の盗賊やで！」

ケット・シーがずっと前に進み出た。どこから声を出しているのか判らないヌイグルミなので、いつも彼と会話するときは周囲の視線が気になって仕方ない。

ケット・シーは更に続けた。

「正義や悪、そんなもんとは無縁に生き、飛空艇ヒルダガルデを駆るさすらいの怪盗！」

神出鬼没で、変装の名人！ 人は絶対殺さない、自称“恋の狩人”でんなー！」

「アタシも聞いたことあるよ。どんなに嚴重に警備しても、いつの間にか盗まれちゃうんだって！」

ユフィはケット・シーを補足するように言った。

「その、盗賊が、ガーネットさんを盗むと…？」

クラウドが尋ねると、ガーネットは不安げにこくりと頷いた。隣でディオが泣いている。

「彼女はこれから世界に羽ばたく逸材なんだ…。人気もそこそこ上がってきて、

さあこれから彼女の時代が始まるってときに、こんなことになるなんて…。

少年！ コレルプリズンや、闘技場制覇の実力を見込んで頼む！ 彼女を守ってやってくれ！ このゴールドソーサー園長ディオ、一生のお願いだっ！！！」

「警察にでも、頼めばいいだろう?」

今まで黙っていたヴィンセントが呆れたように呟いた。彼の表情から察するに、相当下らないと思っっていることだろう。しかし、デイオはこの提案に対して返答を濁した。

「もう頼んだんだが、担当が…」

「担当?」

「ジタン一筋で来てる警部だと聞いて安心したんだが、実物を見て信用出来なくなった」

デイオが言い終わるや否や、ドストスと足音を響かせ申し合わせたように舞台袖からひとりの男が現れた。

くたびれた褐色のコートに身を包み、かなりの年寄りだと思われる帽子を頭にちょこんと載せて、ギラギラと眼を輝かせた厳しい男性がダミ声でデイオに言う。

「周囲の警備は完璧です! どうかご安心下さい!」

「あ、ありがとうございます。皆さん、紹介しよう。こちら、ジタン四世担当の…」

「アデルバート」スタイナー警部であります!」

びしつと敬礼を決め、スタイナーは突き出た顎を尚更誇張するかのよう胸を張った。

「警部、こちらの方々はガーネットさんの知人の方々に、舞台を鑑賞しにはるばるいらしたのです」

「おお〜! それはそれは! どうぞ、ごゆっくり鑑賞を楽しんで下さい!」

ジタンめはこの私が必ずや、逮捕してご覧に入れますので! は

っはっはっは!!」

…。

一同、固まる。

根拠のない不安感が、この人を見ていると鎌首をもたげてくるようだ。ディオの憂患も、判る気がする。

後からもつひとり警官が出てきた。彼はスタイナーに歩み寄ると、小声で何か言った。

「うむ！ そうか！ では皆さん、本官は警備に戻りますので、これにて失礼いたします！」

スタイナーが行ってしまつと、ディオは深い溜息をついた。

「判ったかい？ 少年」

「…事情は飲み込めたけど…俺たちにどうしろと？」

「多分奴は、劇が最高に盛り上がった頃にやって来るだろう。派手好きな男だからな」

「それなら出てきたところをとっつかまえりゃいい」

バレットが言う。しかし、ディオは力なく首を横に振った。

「やめてくれ。劇が台無しになる。せつかく楽しみにしていたお客さんを、失望させたくない」

「なら、お手上げじゃないのさあ！」

ユフィが口を尖らせた。

「だから、さらわせればいい！」

突然自信に満ちた眼を取り戻してクラウドを見たディオ。先ほどまでと言っていることがまったく矛盾している。つつこむべきか、気が動転してしまっているのだから労ってあげるべきか判りかねた。

「オトリだよ！ わざと女優をさらわせて、ジタンの後をつける。

あわよくば、奴を逮捕出来る！」

「あんた、何意味わかんないこと言ってんだ？！ もしもガーネットさんに何かあったら…」

「だからオトリなんだよ、少年。ガーネットさんは安全な場所に隠れてもらって…」

「は…？」

全く事情が飲み込めない。ディオは最後の一押しをするように、付け加えた。

「そっくりじゃないか、ガーネットさんは、少年の仲間の少女に！」

ディオはじつとティファを見る。一同、その視線に倣ってティファを凝視した。

キョトンとした眼で、ティファは問い返す。

「へ？ ……わ、私!？」

「ガーネットさんに化けた少女をさらわせ、奴の飛空艇まで案内させるのだ！」

「名案や…！」

ケット・シーが思わず叫んだ。しかし、ティファは真っ赤な顔で拒否する。

「そつ、そんなー!! 私、劇なんて生まれてから一度もやったことないのよ!?!」

「いいじゃない! ティファ! やってみなよ!!! ティファなら、可愛いから絶対ばれないつて!」

エアリスが笑顔で勧める。悪意はない。それだけは全員が判っていた。

「だ、大体…私ドレスなんてチャラチャラしたものの着たくないわ!」

「え〜?! オイラ見たいなあ、ティファのドレス姿!」

レッド??の尻尾が嬉しそうに揺れている。ティファはクラウドに救いを求めるように彼を見た。

しかし、クラウドも…。

「…そうだな。万一ジタンが本当に現れてティファをさらったとしても、

ティファなら俺たちが駆けつけるまでの間、時間を稼げるかも知れない…!」

「~~~~~!!!!!!」

最後の救いの道を断たれ、ティファは泣きそうになる。

しかし、それに追い打ちを掛けるように…。

「ティファさん、お願い…出来ますか?」

ガーネット本人からも嘆願されてしまった。もはや逃げることも出来ない。全員の視線と考えが一致してしまっている以上、ここで自分の意志を貫き通してしまったら、彼女は悪人の烙印を押され

てしまうに違いないからだ。

しかし、ティファにはどうしてもそれを受諾出来ない理由があった。

もしその悩みがなかったら、ひょっとすると快くこれを受け入れていたのかも知れない。

「イヤッ!！」

ティファは突然走り出し、舞台の脇にある控え室のドアを開け、中に入ると乱暴に閉めてしまった。

慌てて後を追うクラウド。ノブを回すが、鍵をかけられてしまったようだ。頭を掻く。

すると、中から何やら聞こえ始めた。クラウドはそっと耳を近づけ、そして微笑む。

「デイトさん、ちょっと」

「ん？」

デイトを招き寄せ、クラウドは言った。

「結構、やる気みたいだ。ティファは」

「ほっ、本当か?!」

デイトはクラウドと一緒にドアに耳をつける。中から、それは聞こえてきた。

あー あー ラララー らー あ うん…。

「や、やった…これで作戦が決行出来…」

羅羅 あああ…。

!?

クラウドとディオが驚愕の視線を交換する。
次の瞬間…。

めとおすい…のオ… あなた…わア…
とおうい…ところづえ… 螺羅裸…

「ぐわ~~~~~」
「ぎゃ~~~~~!!」

ふたりの男は、一瞬にして気を失った。

×××

クラウドが眼を醒ますと、ティファはエアリスに寄りかかって頬を膨らませ、彼女に撫でられていた。ばつの悪そうな顔で、クラウドはティファに歩み寄る。「…す、すまん」ぷい、と視線を逸らし、ティファはそっぽを向いてしまった。エアリスはクラウドに「しっしっ」と掌を振る。ここはエアリスに任せようと、クラウドは踵を返した。

「あああああ…何てことだ…頼みの綱が、音痴…しかも殺人的うお~~~~んちとはあっ!!」

「ちよつとツ!! 誰が殺人的ですつてツ!!?」

ティファは半泣き状態だ。ディオはしまったという表情をして、肩をすぼめる。

仲間たちも衝撃を受けたのか、誰一人として口をきかなかった。ステージに、重たい沈黙が流れる。レッド??などすっかり尻尾を腹に巻き込んでしまっている。シドは在らぬ方向に眼を向け、葉巻をくわえている。ヴィンセントは眠そうだ。ユフィはマテリアを数えている。バレットはケット・シーと話し込んでいる。そんな風景を見ながら、クラウドは思い出していた。

そういえば、ティファの歌なんて聴いたことがなかったな…と。
これで替え玉作戦は、発動する前に失敗に終わった…かに見えた。

「さて…どうしたものかな…」

クラウドは腕組みして考え込んでしまった。

「ディオさん」

声を掛けたのは、意外にもエアリスだった。ディオは落胆した眼を彼女に向ける。

「公演は、いつなんです？」

「…三日後の夕方七時からだが…？」

「三日かぁ」

「警察などアテにならん。ああ…ガーネットがさらわれたりしたら、ゴールドソーサーは…」

エアリスはしばらく何か考えているようだったが、決心したようにディオに告げた。

「考えが、あるんですけど」

意味深な微笑み。ディオは首を傾げる。

エアリスは軽い足取りで、いじけているティファのもとへ歩いていく。そしてティファの肩を叩き、何やら耳打ちする。

「…でも、私…音痴だし…」

「ティファ〜！ 親友のお願い、聞いてくれないのぉ？」

「わ、わかったわよう」

渋々立ち上がったティファ。エアリスはディオを手招きする。ディオも重い腰を上げ、ふたりのもとへ歩いていく。キョトンとしているクラウドに、エアリスは微笑みかけた。

「じゃ、クラウド。私たちこれから作戦会議してくるわねっ！」

「作戦会議？」

「クラウドたちはもうちょっとだけホテルで待っててね！ さ、いこいこっ！」

ディオとティファを押しして、エアリスは控え室に入ってしまった。大ホールは静寂に包まれる。

「…終わったのなら、帰ろう」

グインセントが口を開いた。一刻も早くここを立ち去りたくてたまらないのだろう。

「で、でも…」

クラウドは渋る。「いやーじゃん！ エアリスに何か考えあるんでしょ？」マテリアを荷物の中へ収納し、ユフィは早くもホテルへ向かう。レッドもそれに続いた。

(…なんか、みんな冷めてる)

クラウドは思った。バレットがクラウドの背中をバシッと叩く。

「エアリスのことだ、何か考えがあるんだろう！ 任せてよ、俺たちもホテルに戻ろうぜ！」

「あ、ああ……」

バレットに腕を掴まれ、ずるずると引きずられるようにクラウドはイベントスクエアを後にする。

…誰も、ステージ上にぽつんと置かれた手紙に気付かずに。

「だ〜っ！ 読まんかい！！」

舞台の影から、太って眼つきのいやらしい小男が現れた。今まで隠れていたのだろうか。趣味の悪い赤い服に、埃が付着してしまっている。

「ほひ〜〜〜！！ 一から十まで気に食わん奴らだあ！！」

ずかずかと手紙に近寄り、無造作にそれを掴み取る。人目を避けるように、こそこそとその男はエアリスたちが入っていった控え室のドアに近付き、辺りを見回したあと、ドアの隙間からそつとその手紙を差し入れた。どういう具合に入ったのか知る術はなかったが、とりあえず中に入れば良かった。

男はにたりと淫猥な笑みを浮かべ、満足げに腹を叩く。

男の姿を見た者は、誰もいない。

×××

クラウドたちが呼ばれたのはそれから数時間経ってからだった。そわそわして落ち着かなかったクラウドは、すぐにもイベントス

クエアに駆けつけた気分だったが、一応全員に声をかける。
しかし、返答は余り良くなかった。

ユフィとヴィンセント、そしてシドはホテルで待っていると、素
つ気ない態度。結局、ついてきたのはケット・シーとバレット、レ
ッド??? だけだった。

スクエアに続く穴を抜け、ホールに足を踏み入れる。
ステージには既に何人かの人影が見えていた。クラウドたちは急
ぎ足でそこへ駆け寄る。

「あ、来た来た！」

エアリスが手を振る。隣で、ティファは恥ずかしげな表情で俯い
ていた。

見れば、ステージにいるのはエアリス、ティファ、ディオだけで
はない。何やら妖しげな洋服に身を包んだ青年が、三人の傍に立っ
ていた。その横には、幾分落ち着いた感じだが、どこか影のある青
年がクラウドたちを見ていた。どうやらガーネットはいないらしい。
恐らくは、もう安全な場所に移したのだろう。手回しが早いと、ク
ラウドは思った。

「やあ、少年！ 遅かったな！」

ほんの数時間前まで、死を宣告された患者のように落ち込んでい
たディオ本人とは思えないほどの明るい声で、彼はクラウドに声を
かけた。それに少し面食らう。バレットたちも驚いた様子だ。

「紹介しよう、こちらは劇で東軍の王子、ラルス役を務めている…」
「クジャといえます。以後、お見知り置きを」

奇抜な衣装を身に纏った方の青年が軽く頭を下げる。流れるような銀髪が印象的だった。

「そして、マリアと恋仲を演じる、もうひとりの主人公、ドラクウ役のブランクだ」

「…どうも」

ブランクと紹介された青年は、伏し目がちに挨拶をする。無口なタイプらしい。それきり、ブランクはクラウドたちから眼を逸らしてしまった。巻いたバンダナに眼が隠れ、表情を読むことは出来ない。

個性的な面々を目の当たりにして、一瞬我を忘れたクラウド。しかしすぐに本題を思い出す。

「それで…作戦の方は？」

「ああ。当初の計画通り、少女にガーネットの替え玉をお願いすることにした！」

ディオはティファの肩をぽんと叩く。
複雑な面持ちで、ティファは頷いた。

「なっ?!」

「何言つてやがる!? あんた、さっきティファの歌聴いて失神…」

慌ててバレットの口を塞ぐクラウド。ティファはオニのような形相で、バレットを睨んでいた。苦笑いとともに、クラウドは更に聞いた。

「そ、それもそうだ。これはオペラなんだから? その…歌のシーンはどうするんだ?」

まさか録音したものを流すなんてわけにはいかないんだろ？」

「当然だ。オペラとは魂の叫び！ 生で伝えてこそ、真の価値を見出す代物だよ！」

「それじゃお話になりませんがな！ ティファさん歌いおつたら、きつと観客全員……」

ケット・シーの身体に、ティファのサマーソルトが食い込んだ。相手が生身でないと判っている以上、容赦はない。彼の身体はまるでゴミ屑のように観客席に突っ込んだ。ごくりと唾を飲み込む一同。

「……ティ、ティファ……本当にいいのか？ ティファがイヤなら、別に断つても……」

「やるッ！ やるもん！！ こんなに馬鹿にされて引き下がれないわッ……！」

蒸気が、彼女の頭に見えるようだ。頬を膨らませ憤慨するティファ。

するとクジャが、すすつとティファに歩み寄った。

「ガーネットの代役とはいえ、こんなに美しい女性と共演出来るなんて……僕は光栄です」

「……は、はぁ」

「ティファさん、きつと舞台を成功させましょう！」

「も、もちろんですっ！」

必要以上にティファに密着したがるクジャ。クラウドはカチンときた。

「おい、コラ。ちょっと馴れ馴れし……」

「よぉ〜っし……！ それじゃあ練習始めましょ！ みなさん……！」

クラウドの前にエアリスが割り込み、無理矢理発言権を剥奪してしまった。言いかけていたことを喉の奥に押し戻され、何とも遺憾な気持ちになってしまったクラウド。

「おい、エアリスっ！」

「クラウドたちは、本番中にジタンが現れたら、すぐに後を追う」と！

「…」

「判ったの？ 判らないの？ どっち?!」

「わ、判ったよ…。本当に、大丈夫なんだろうな？」

クラウドの問いかけは、時として彼女の笑顔によって有耶無耶にされる。今回も、そうだった。

エアリスは小悪魔的微笑みをクラウドに返し、ぱちっとウインクして見せた。それをされたら、もう彼に出来ることはない。所詮、エアリスから主導権を取り戻すことなど出来ないのだ。

「それじゃ、行きましょ！」

ぞろぞろと舞台の奥へ下がっていく、オペラ関係者たち。残された部外者は、結局オトリ作戦を実行すること以外、何も判らないままであった。

x x x

それから二日が過ぎた。

寝る間を惜しんで稽古に精を出すティファ、クジヤ、ブランク、そして他の出演者たち。クラウドは一部始終をずっと観察し続けていた。こちらも、ほとんど寝ていない。観客席に座り込み、ジツと舞台の上を凝視している。一般の人間から見れば、ちょっと危ないお兄さんといったところだ。

その甲斐あってか、クラウドは大体の劇構成を覚えてしまった。

「…戦争によって引き裂かれた、西軍の姫マリアと戦士ドラクウ…。戦に敗北した西軍は居城を東軍に占拠され、マリアとドラクウは離ればなれに。

一方東軍の王子ラルスはマリアの美貌を見初め、彼女に結婚を申し込む。

生死が定かではないドラクウに思いを馳せ、マリアはそんな求婚をどうしても受け入れられない。

毎晩城のテラスに出ては、遠くで同じ夜空を眺めているであろうドラクウを想う日々…。

だが、依然としてドラクウの消息は不明…。マリアの心は揺れ始める。

このまま彼を忘れ、ラルスと結婚した方がいいのではないかと。そして、運命の夜が訪れる…。」

「すごいすごい！ クラウド、もう完璧に話の流れ掴んじゃってるぅー！！」

独り言のように呟いていたクラウドは、隣に座ったエアリスに気付かなかった。

余りの恥ずかしさに顔面は赤くなるどころか蒼白。エアリスの顔など、まともに見ることは出来ない。クラウドは何とか話題を急転換しようと思いを巡らせるが、ほぼ徹夜に近い鑑賞で脳細胞が働か

ない。

「…うあ…」

「ぷっ！ なあに？ クラウド寝てないの？」

「…ああ」

「どおして？」

「いや、別に深い意味は…」

「ウソ。顔に書いてある」

思わず顔に触れてしまうところが、憎たらしい。クラウドはすっかりペースに吞まれた。いつも彼を振り回す美姫の術中に、いつものようにはまっていた。

「ティファのこと、気になるんでしょ」

図星。

「あのねえ、あのクジャって人、女の子にモテモテでしかもプレイボーイなんだって」

「…ほう」

「稽古の間、ずっつとティファにくっついちゃってさあ…ホント、女の子大好きみたい」

「…ほう」

リミットゲージ、98パーセントまで上昇。

「だからダンスの練習しかしないわけか…」

クラウドは言った。この二日間、ティファはほとんどダンスの練習しかしていない。少なくとも、クラウドの見える範囲では。こ

こはイベントスクエアの二階席なので、舞台全体が見渡せる。細部まで眼を光らすことは叶わないが、誰が何をしているかくらいは十分把握出来る。

クジャとティファは常に一緒だった。どうやらダンスパーティーの場で、ふたりはお互いにダンスの相手をするらしい。その練習なのだろうが、いくら何でも時間のかけすぎである。これはオペラだ。歌がなくては、ただの劇になってしまうではないか。クラウドはまだ、ティファの歌声をこのイベントスクエアの二階席で聞いたことがなかった。あの、どうにも形容しがたい旋律を…。

「…やっぱりな。最初からこんな作戦、上手くいくわけなんてない」「え?」

クラウドは立ち上がっていた。これはこのまま二階から飛び降り、舞台へ殴り込むつもりだ。

エアリスには一瞬で判った。

「俺たちは古代種の神殿に一刻も早く行かなきゃならないんだ。こんなところで道草を食っている暇は…」

「ちょ、ちょっと待ってッ! クラウド!」

歩き出したクラウドの腕を、エアリスが掴む。

「離してくれ。ディオと話をしてくる」

「ま、待ってってば! 私の話、きいてっ!」

無理矢理自分の方に身体を向けさせ、エアリスはふうっと大きな溜息をついた。

「…ごめんなさい」

「え？」

しゅんとした表情になったエアリスに、クラウドは突然謝られてしまった。思ってもみない展開に、先ほどまでの熱が全部吹き飛ばされてしまった気分である。エアリスは俯き加減で、正確な表情は読み取ることが困難だった。「な…何が？」思わず、クラウドは訊いた。

「私、その…ちょっと意地悪な女だった。今…」
「イジワル？」

「だって、クラウド舞台見てばかりだし…ティファのこと気にしてばかりだし…ごによごによ」

「ど、どうしたんだよエアリス…。何かあったのか？」

(もう…ホントに鈍いんだからあ！)

「悪かったよ。俺もどうかしてた。俺たちが何とかしないと、ガーネットさんが危ないんだもんね」

「うん、そーだよ！ それにね、ちゃんと本番、何とかなるから」

「…イマイチ、その根拠がどこから来るのかだけは判らないんだよな…」

「えへへ、それはひ〜みつ！ それよりも、クラウドちゃんと食べてる？」

ぎゅるる…。と、身体が素直な返事をエアリスに返した。

「…素直でよろしい！」

「う」

「だいじょぶだって！ ティファがあんなチャラチャラした男の人に落とされるわけないじゃん！」

ティファ、今何とか劇を成功させようとしてるの。だからあんなに一生懸命なんだよ」

「…判ってる。済まなかった、エアリス」

「じゃ、何か食べにいこ！」

「は？」

「モチロン、クラウドのおごりね」

「お、おい…」

エアリスがクラウドの腕に自分の腕を絡ませる。無理矢理席から立たされ、クラウドはエアリスの先導するままに食事に向かうこととなる。

ティファとクジヤの行動にはまだ不満が残る。それ故、後ろ髪を引かれる思いであった。

けれどもそれは、実際にティファの視線が後ろ髪を引いていたからかも知れないのだが。

「ティファさん？」

観客席を線のような眼で見つめるティファを、クジヤは不思議そうに眺めていた。本当は、クラウドにエアリスが近付いていった辺りから全ての注意がそちらへ集中してしまい、ダンスの稽古どころではなかったのである。ステップを踏む間、ちらちらとクラウドたちの方へ視線を向けては、クジヤの足を踏んだり自分が転びそうになっったりしていたのだった。

ワガママだろうか。

何時間も自分を見ていてくれたクラウドの視線。自分はクラウドを独占していた。それを、他の女の子に持って行かれるのを嫉妬するのは、横暴だろうか。

いや、そんなことはないはずよ…と、彼女は自分に言い聞かせる。好きな人の視線をいつまでも独占していたいと思うのは、恋する女性なら誰も思うことだ。そうであって欲しい。それ以外の、何でも

ない。未だに胸の内に秘めたクラウドへの想いは、誰にも負けてはいないと思う。

あの日…ドン・コルネオの屋敷に、彼女を救出するため、女装までして乗り込んでくれたクラウドの隣には、自分にはない魅力を持った美しい女性がいた。助けにきてくれたこと自体は涙が出そうになるほど嬉しかったのだが、『早速他の女の子と仲良くなってるのが気に入らないわ』。

そのときはそう思った。

けれども次第に…エアリス…ゲインズブルという少女のような大人の女性の魅力に、ティファ自身も呑み込まれていったように感じる。屈託なく笑いかけてくれるエアリスという存在は、ティファが未だかつて経験したことのない安らぎをもたらしてくれたのだった。エアリスのことを好きな自分。そのエアリスは、多分クラウドのことが好き。クラウドは…一体誰が好き？

今はまだ、曖昧な態度しか取る勇気がないけれど。
エアリスも自分も、お互いに遠慮し合っているのかも知れないけれど…。

（あ…いつけない…！ そんなこと考えてる場合じゃないんだっ
！）

はた、と今自分自身が置かれている状況に気付いたティファは、自らの気持ちの弱さに呆れた。

今しなければならぬことはひとつ。
エアリスに言われたことを必死で練習するだけだ。出来ることをやろうと決めたのだから。

「あ、あの…済みませんでした」

ティファは面食らっているクジャに謝り、すぐ元のようにダンス

の練習に戻ろうと彼の手を取った。
クジヤは笑い、面白そうに言う。

「ティファさん、あの人が好きなんですかね？」
「……！」

「隠さなくても判ります。こういう仕事していると、こういうわけか
“演じている”人は判るんです」
「演じてる？」

「ええ。あなたは心の中で別のあなたを演じている。それくらいは、
判ります」

「そうですね……」

「ですが、ダンスの最中は完璧にあなたに与えられた“役”を演じ
てください」

クジヤの台詞にどきりとした。浮ついた心で、この劇を演じて欲
しくなかったのだ。

彼について女たらしだとか鬼畜だとか酷い噂ばかり聞いていたテ
ィファだったのだが、ひよっとするとそれは全部ウソなのかも知れ
ないと思った。ここまで自分の仕事に対して熱意を持っている人が、
そんなふうに軽い人間だとはどうしても思えない。ティファは少し
でも彼をいやらしいと感じた自分を恥じた。

「さあ！ 私と本物の恋人同士を演じましょう！」

「……え？」

クジヤは楽しそうにティファの手を握り、片方の腕を彼女の腰に
回すと踊り出した。他の出演者たちが呆れた眼で見ている。

（……クジヤさん……ラルスってハッキリ言ってお邪魔虫役なんじゃ……
？）

ティファは先ほど彼を尊敬するような感情を抱いた自分を、
恥じた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

中編

開演時間は、午後七時三十分。

その日、世界最大のエンターテイメント施設ゴールドソーサーは大変な熱狂の坩堝に吞まれていた。様々な人種の人々。着飾って、顔中に幸福を浮かべ、その瞬間を心待ちにしている。数ヶ月前から増設工事を行っていたイベントスクエアの座席が見る見る埋まってい。コレルとゴールドソーサーを繋ぐゴンドラは、勿論休む間もなくフル稼働である。あちこちに露店が並び、このイベントの話題性に乗せようとしていた。人々の夢が盛りつけられた“黄金の皿”は、世紀の大舞台の開演時間を待つ。

A r i a D i M e z z o C a r a t t e r e
V e r . F F ? 中編

エアリスが姿をくらませて、もうすぐ24時間が経過する。

クラウドは気が気ではなく、他の仲間たちも躍起になって探し回ったが、行方は杳として掴めなかった。不思議なことに、ディオやティファに尋ねても何ら気にも留めていない様子で、揃って気にしない方がいいとクラウドに進言するのだった。

関係者通路を歩きながら、クラウドは慌ただしく舞台の準備に追われるスタッフとすれ違う。何でも、観客席が足りずに混乱が起きているという。そこまでして見たいものなのかと、彼は思った。ライトで明るく照らされた通路にいても、クラウドの眼に映るのは薄暗い光。網膜にフィルターでもかけられたような感じだった。舞台関係者であるエアリスの失踪を、舞台関係者であるティファたちが心配するなと言うのだから、それはそうした方がいいのかも知れない。

しかし彼女に関して、クラウドは楽観視することがどうしても出来ない。影で暗躍するセフィロスのことも気になる。黒マテリアを巡る狂気が、今この世界には渦巻いているのだ。そんな直中に、エアリスが独りで迷い込んだとしたら…。

クラウドは頭を振った。ボディガードがこんな弱気でどうする。しっかりしろと自分に言い聞かせた。

「おう！ クラウドじゃねえか」

向こう側から歩いてきたのはバレットだった。彼の巨体は、狭い通路にあって相当邪魔に見える。すれ違うスタッフたちは、苦労したに違いない。

バレットはずかずかとクラウドに歩み寄り、その冴えない表情に気付くと豪快に笑い出した。

「がっはは！ お前そんなにエアリスが気になるのか!？」

「…当たり前だろ」

「心配すんなって！ ティファだって言ってたじゃねえか。大丈夫だって」

「しかし、どこにも確証がない」

「だ、もう！ ウジウジうるせーな！ 俺たち専用の席、用意してくれたんだってよ！」

「専用の…席？」

「おう！ 特等席だぜ！ もうみんな集まってる。早く行くぞ！」

「お、おい…」

有無を言わず、バレットはクラウドを引きずっていく。

何だか最近引きずられてばかりだなと、クラウドは思った。

×××

「あゝ！ 来た！ 遅いよクラウド！」

ユフィがクラウドに手を振る。その隣にはレッド??やヴィンセントが鎮座していた。

「どうやら、ここはVIP待遇の賓客が案内される席のようだ。一階から三階席を見下ろし、なおかつぐつと舞台へせり出して建造されたスペースである。席は数えるほどしかなく、ここが特別待遇であることを暗に示していた。見渡せば、席は大方満員。恐らくまだ増加するだろうから、数分後には満員に達するだろう。」

「…へえ、随分増築したんだな」

余りの変わりように、クラウドは言葉を漏らした。ゴールドソーサーに来たことは何度かあるが、このイベントスクエアには余り足を運ばない。ティファには内緒にしてあるのだが、エアリスとデートしたとき、彼はこの場所に訪れていた。そのときはすっかり気が動転していたのか、周りの様子を注視する余裕などどこにもなかったように感じる。記憶の貯水池の底に沈殿しているイベントスクエアの最後の光景は、確か舞台も余りぱつとせず、観客席もそれほど多くはなかったはずである。それがいつの間にか本格的音響設備が各所に施され、シートは全て赤い上質の素材で作られ、舞台は美しく飾り立てられていた。田舎の体育館ほどの広さだったイベントスクエアは、すっかり大コンサートホールへと化していたのであった。現在ステージには暗幕が下ろされており、内部の様子を知ることが出来ない。鮮やかな幾何学紋様の暗幕が、時折中から押されたように突き出る。あの中では今、想像を絶する舞台準備という名の戦争が繰り広げられているのだろう。ふとクラウドがそこから視線を少し下げた。「……？」少し、妙なことに気付く。

「満員、なんだよな？」

「どしたの？」

クラウドは最前列から何列か、客が全く座っていない席を見付けて疑問に思ったのだ。満員で座るところが確保出来ず、混乱が起きているという。それなのに観客を座らせない席を設けるというのは、どういうことなのだろうか。最前列から舞台まで、かなりの距離がある。実際の最前列ではないが、現在の最前列となっている席の観客が、演技を見るのに不都合ではないかと思ったのだ。

「わかんないけど、あそこから前には絶対人が座らないんだよね」

ユフィも不思議そうだ。

「はっはっは！ アレはわざと空けておいたのさ！」

振り向くと、いつもの意味不明な半裸の格好ではなく、きちんとスーツに身を包み、正装したディオが満面の笑みを浮かべながら立っていた。逆に、気味が悪い。

「わざと？」

「ああ。こちらの作戦だ」

「作戦って…あそこを空けることに何の意味が…？」

無論、明瞭な答えが返ってくるとは期待していないが、半ば儀礼的にクラウドは尋ねてみた。

「なあに！ 生まれれば判るさ。それより、少年！ 頑張ってくれたまえよ！」

警察には今回の作戦を一切報せていないんだからな！」

「ええ?!」

一同はぎょっとした。当然、警察との相互援助のもとに展開される作戦だと思っていたからだ。

「どういうことだえ?! ケーサツの助っ人なしで、ジタンを掴まえるってのか!?!」

シドは感情的になった神経を逆撫でされ、激昂する。イベントスクエアは禁煙で、煙草が吸えないからだ。

観客が入っていないときならば問答無用で火を付けるだろう彼だったが、流石にこの超満員の中、無礼にも紫煙をくゆらすほど厚顔ではない。

「ふむ。その通り」

「んな無茶な…」

「いや、案外得策かも知れない」

静かだったヴィンセントが呟く。

「この作戦、構成員が増えれば増えるほど統率が難しくなる虞がある。」

それならば最初から少数で統率のとれた集団だけで行っのが、ベストだ」

「じゃあ、警察は？」

クラウドはディオに訊く。

「彼らには通常通り、警備を行ってもらっている。観客の中にも十数名潜り込ませた」

「この…中に？」

見渡す限りの大群衆である。ざわざわとまるで木々のざわめきのような声が反響している。少なくとも見積もって四千人はいるだろう。その中に、たった十数名を潜らせただけでは、心許ないと言う以外にない。大半は外の警備に回したのだろう。中は、あくまでもクラウドたちに任せるつもりなのである。

「ジタンが出たら、どうすればいいの?!」

レッド??がわくわくしながら尋ねた。

「…それなんだが、せっかくの舞台に突然乱入すれば、劇を台無し

にするかも知れない。

だが、ジタンを逃がすわけにはいかん。済まないが君たちには、舞台へは上がらないでもらいたい」

「舞台へ上がらない？」

「飛空艇へ案内させればいいんだ。どういつ手段で来るのか知らないが、奴は必ず、

ガーネットをさらうために舞台の上へ上がるだろう。そこが勝負だ。

役者たちには、なるべく“演技”っぽく対応しろと言付けてある。判るかな？」

「…つまり、ジタン乱入を…」

「そう、“演劇化”してしまうわけだ！」

ディオは熱っぽく語った。「でも…」ユファイが口を挟む。

「大丈夫かなあ、それって」

「なあに！ 心配は要らん！ 何しろあの舞台にいるのは演技のブ口だからな！！」

上手くアドリブで切り抜けてくれるはずだ！ その点も打ち合わせ済みだよ！！」

「で？ 俺たちは？」

逸れた話題を軌道に戻すように、クラウドは言った。

「ああ。君たちはジタンが舞台を離れた瞬間に動き出してもらおう。そこから先は、任せる」

「…相手がどう来るか判らない以上、それしかない…か」

自らを納得させるように、クラウドは頷く。他の面々もそれに賛同するようだ。

時刻を確認すると、七時十五分を回っている。開演まであと僅かだ。人々もそろそろ自分の席に戻り始める。バラバラになったジグソーパズルがひとりでに完成されていくようで、見ていて不思議な感じがした。いよいよだ。クラウドは念を押すように、ディオに訊く。

「劇の準備は？」

「はっはっは！ 少年、彼らはプロだよ?! 抜かりなどあるはずないだろう!」

「そうか。じゃあ、もうひとつ訊きたいんだが…」

「何かね？」

「エアリスはどこだ？」

にやついたままの表情で、ディオが固まってしまった。時計が止まってしまったようだ。怪訝そうにそれを眺めるクラウド。やはり何か隠しているのだろうか。ネジを巻き直したのか、やっとディオが口を開く。

「だから、心配要らないと言っているだろう？」

「心配要らない？ あなたな、もしもエアリスに何かあったら…」

「あゝ！ まあまあまあ…」

たまらずバレットが割り込み、クラウドとディオの間に立つ。「どっちにしろ、今騒いでも仕方ねえ」正論だ。今自分たちが考えなければならぬのは、怪盗ジタン四世の犯行を如何にして防ぎ、そして同時にこの劇を如何にして成功させるかだ。クラウドも、頭では判っていた。関係者が大丈夫だと言っているのだから、大丈夫なはずだと。しかし連日の監視による極度の睡眠不足（自業自得とも言う）から、彼の神経はピリピリと乾燥しきった導火線のようになってしまうのである。

いつ引火するか判らない導火線へ火気を近づけるのは、防がねばならない。クラウドに火が点いたときの恐ろしさを、バレットは知っていた。知っているからこそ、急いで彼の導火線に砂をかけて、一応の消火を試みたのだ。バレットは何かクラウドを席に座らせ、デイオには眼でもって『早く行け』とサインを送った。意を汲んだのか、デイオが関係者通路に続く階段をそそくさと下りていくのを確認すると、やっとバレットの肩の荷も降り、どっかりと自分の席に腰を下ろす。

クラウドは面白くないことが続いて、口をへの字に曲げてしまった。

（クソ…何がジタン四世だ。何がマリアとドラクウだ。クジャだ、作戦だ…！！）

自分でも自分の思考がどうなっているのか判らなかつた。悶々とした汚泥のような感情が、彼の頭を支配する。そんな異様な表情のクラウドに気付いたのか、隣のユフィが助け船を出した。

「ね、ねえクラウド？ アメなめる？」

「…」

「ホラ！ イチゴ味！ オイシイよ〜!？」

更に隣のレッド??は、この余りにも幼稚すぎる宥め方につくりとつなだれる。

クラウドはぎらついた眼でユフィの掌に乗った三角形のアメを凝視すると、おもむろに摘んだ。

「…」

「ね？ お、オイシイでしょお!？」

「…もつとくれ」

「はいはいはい、クラウド様のためならば、はい」

意外にも大人しくなったクラウドを見て、一行はほっと胸を撫で下ろさずにはいられなかった。

しばらくそうしているうちに、会場に変化が起こる。次第に照明が絞られていくのだ。段階的に暗くなる場内。すると、観客から盛大な拍手喝采が巻き起こった。いたるところから指笛の囃しも聞こえてくる。クラウドは時計の“LIGHT”ボタンを押し、時刻を確認する。開演一分前。仕事の始まりだ。

こういうとき、人間の反応というのは決まっているもので、どんなに興味のない者であったとしても、何か大きなイベントが始まる前というときは姿勢を正してしまうものである。クラウドも自然と上質の繊維で編まれたであろうシートに深く腰掛け、背筋を伸ばさず。ざわざわと落ち着かない観衆の空気が伝わってくる。それを吸い込んでみると、何だか自分もその世界に呑み込まれていくような気持ちになる。

完全に照明が落ち、一瞬の間の後、どこかに据え付けられたスピーカーからディオの声が流れた。

『ご来場の皆様、大変長らくお待たせしました。

只今より、古典文学の傑作、“マリアとドラクウ”を上演致します。ごゆっくりお楽しみ下さい』

ワツと更に大きな拍手が巻き起こる。

クラウドたちも拍手を送る。何とヴィンセントまで拍手しているのを見て、クラウドは眼を丸くした。

直後、上演を告げるブザーが高らかに鳴り響く。長い反響の後、一瞬にして観衆は静まりかえった。直後までとの余りのギャップに、

耳の奥にはまだ微かな歓声の余韻が残滓として残っているようだった。

曲が、流れ始める。これは交響楽団による生演奏だ。どこに陣取っているのかと探す。すると舞台のすぐ下方で、指揮者のタクトが何かの光に反射した。総勢何名だろう。随分大がかりな劇である。

『西軍と東軍の戦いは日ましに激しくなっていた。』

西軍のガルー城の戦士ドラクウは激戦の戦地で母国に残してきたマリアのことを想う……』

ナレーションが流れる。そして、遂に幕がゆっくりと上がった。今一度、盛大な拍手。

闇の中に、男性の姿が浮かび上がった。仰々しい甲冑に身を包み、胸に手を当て観衆に向かっている。照明が一斉に彼の方へ集中し、クラウドはそれが役者のブランクであると判った。彼はそのままの体勢で一歩、二歩とゆっくり歩いていく。そして、数メートルほど進んだところで、音楽の曲調が変わった。

ブランクはすうつとこの崇高で気高い空気を吸い込み、心の底から、唄う。

オー マリア オー マリア わたしの こえが とどいて
いるか おまえの もとへ

それはとても力強く、そして聞く者の骨に響いてくる声だった。
あの無愛想な青年のどこにこれほどまでの声量が隠されていたのか
と、クラウドは驚いてしまう。

「始まったね」

ユフィが小声で言う。

「俺、控え室に行つて来る」

「ティファ、見に行くの？」

暗闇で良く判らないが、多分にユフィはにやつていることだろう。クラウドは答えず、静かに立ち上がった。観客は皆、既に劇の世界に吸い込まれている。見ればバレットやシドも、あのブランクの歌声に度肝を抜かれてしまったようだ。完全に魅入っていた。

舞台ではブランクの他にも、鎧甲に身を包んだ役者たちが現れてシナリオを進めていく。その全員がとんでもなく唄の上手い者ばかりだ。マイクなしにここまでハッキリと声が届くなど、クラウドにはとても真似出来そうにない。だからこそ、ティファが気になる。

どうするのだろうか。あの、何とも形容しがたい…いかれたラジオのような歌声の持ち主が、このような歌唱のエリートの中に入っているはずはない。まさか本当に録音したものを使うのだろう

うか。クラウドはその仮説をすぐに取り消した。無理だろう。ここで生の歌声を聞けば、それが判るからだ。生の声と録音では、その緊張感が雲泥の差なのである。生の声には生の声にしかない、オーラのようなものがあるのだ。さしずめ、“言霊”とでも喻えられようか。

とにかく、ティファにそんなプロの真似事が出来る訳がない。

「大丈夫かな」

レッド??が呟いた。それだけでは、劇の行く末が不安なのかティファの様子が不安なのか判りかねる。

「お？ 何でみんな唄ってるんだ？」

バレットがさも珍しそうに言った。彼はこの劇の形式そのものが判っていない。

隣のシドがクラウドに気付き、たしなめるように言った。

「どこ行くんぞえ、落ち着いて見やがれ」

「…ちよつと用が」

言葉を濁し、そそくさと席を離れるクラウド。

(…なんか、みんな最初やる気なかったのにな…)

豹変した仲間たちの態度に些か不満感を覚えたが、今はそれどころではない。

クラウドは階段を下り、控え室へ続く通路を歩いた。スタッフの姿は、準備の段階ではひっきりなしに見ることが出来たのだが、今は舞台につきつきりなのだろうか。全く見ることが出来ない。コッ

コツとクラウドの濁いた靴音が、やけに大きく響く。

丁度舞台の裏側に当たる部分にやって来ると、クラウドはその左手側にあるティファの控え室へ続くドアに手を掛け、ノブを回した。開けた先には、黒い暗幕。僅かな灯りの中、無数のスタッフたちが劇の様子を見守っている。中には役者の姿も見受けられた。全員舞台袖に集中してしまい、クラウドの存在に気付く者は誰もいない。空き巣のような気分になったが、気を取り直して控え室へと向かう。この部屋は最初、ティファが出演を拒否したときに飛び込んだ部屋だ。あのとときの奇声を思い出し、クラウドは自然と身震いしてしまっただ。

「ティファ？」

ノックは控えめだ。

「はい」

「俺だけど」

「クラウド?! や、ちょっと待って…」

「？」

しばらく中でこそこそ音がしていたが、それが一段落すると明るいティファの声が響いた。

「どーぞ！」

「入るぞ」

それは新しい世界への扉だったに違いない。

中の光景を見たクラウドの眼が見開かれる。そこには確かに、“女神”がいた。

純白のドレスには、煌びやかな装飾が施されている。ウエディン

グドレスを彷彿とさせる衣装を身に纏い、別人のように美しくなったティファがそこにいたのだ。別人とは言ったものの、通常のティファは勿論十分、いや、十二分に美しい女性である。だがしかし、今クラウドの目の前にいるのは果たしてそのティファと同一人物であるのか。いつもは全くしない化粧を施し、彼女の顔の美が強調される。口紅が妖艶な輝きを放ち、クラウドの胸を突き刺す。

馬鹿のように立ちつくすクラウドを見て、ティファが頬を赤らめる。

「やだ、ジツと見ないでよ」

「あつ…わ、悪い！」

慌てて後ろ手にドアを閉じ、ごくりと唾を飲み込む。そして、夢のような現実は今一度眼を向けた。

この美貌が、観衆を魅了する。蝶よ花よとかしづかれ、フリルのスカートが揺れる度に溜息が漏れるに違いない。実際、そうになっている自分が今ここにいるのだから。

胸から上が素肌のままで、彼女の身体のラインの美しさが大袈裟なほど誇示されていた。自ずと、クラウドの顔が赤くなっていく。

「…ティファ、こんなに綺麗だったっけ…？」

「クラウド。訊きたいこと、あるの」

やけに畏まったティファが、俯いた。

「エアリスのこと、どう思ってるの？」

「…え？」

「クラウド、エアリスのこと好きなの？」

「ちよつ、ティファ?!」

「うっん。違う。ごめんなさい…。そんなこと訊きたいんじゃない。

ダメね…私」

「…」

「クラウド？ どうして私を選んだの？」

質問の真意が判らず、クラウドはあれこれと想像してしまった。

選ぶ？ 選択？ いつ？ 誰が？

「私、唄は下手だし…演技なんてもっと下手だし…なのにどうして？」

そういう意味かと、クラウドは理解することが出来た。しかし“唄”と“演技”では不等号の向きが逆なんじゃないのかい、ティファ。と心の中で彼女に尋ねた誰かがいたことは内緒だ。

「ティファは嫌か？ 困ってる人を助けるの」

「…ううん」

「俺も昔なら、相手にしなかったと思うんだ。でも、今は…何て言うんだらうな…違うんだよ」

「違う？」

クラウドは何だか照れ臭くなって頭を掻いた。視線を泳がせると、テーブルの上に劇の台本が見えた。彼女は最初、この部屋に逃げ込んだときこの台本を見て唄ってみたのだろうか。そして、何度も何度も読み返し、自分に出来ることをしようと努力したのだろうか。それは、クラウドには判らない。

「もしこれが俺だったらって考えるようになったんだ。他人は俺じゃない。」

俺は俺でしかない。じゃあ、他人の苦しみなんて全然判らないじゃないか、って」

「…」

「だんだん、お人好しになってきたってことかな。ダメだな、俺」

「…とおんなじこと言うんだね」

「へ？」

「クラウドが変わったの、エアリスのお陰だよ」

「？」

「エアリスと一緒にいて、クラウド変わった。優しい眼をするようになった。」

「私じゃ、クラウドを変えてあげられなかったと思う。エアリスだから、出来たんだと思う」

「そんな…俺は…」

「悔しい。私、クラウドに何もしてあげられない」

ティファは唇を噛んだ。

「まただ。また、自分は話題を転換している。訊きたいのは、最初に言ったことではないか。」

クラウドはエアリスが好きなのか、違うのか。それなのに、またすり替えてしまった。オブラートに包んで伝えることすら、その結果が苦いものだったらと想像してしまつて出来ない。内気で臆病で、ひどく青ざめた感情がティファの美しい姿に影を落とす。

「…ごめんなさい。へんなこと言つて」

「…似合うよ。そのリボン」

ティファは自分の頭に手を当てた。生まれて初めてリボンというものを身に付けた。黄色い、可愛いリボンである。それをクラウドが褒めてくれて、少し嬉しい。

沈黙。

「…そろそろ出番ね。ドラクウの安否を気遣うマリアが自分の思い

を唄にする大事な場面よ」

「唄!？」

思わず声を引きつらせてしまった。慌てて口を塞ぐ。口は災いの元。

だが、ティファは笑って言った。

「大丈夫。何とかなるのよ」

「…?」

「クラウド、ここで見てて。今までの疑問の答え、判るわよ」

意味深な台詞を残し、ティファはスタッフに導かれて舞台へと続く階段へ歩いて行ってしまった。独り残ったクラウドは、ティファの辛辣な想いを頭の中で反芻したあと、動悸が収まるのを待った。結局あやふやになってしまったが、クラウドはティファの問いを思い出す。

「俺は…エアリスのことが好きなのか？」

確かに、変わったのは彼女に出会ってからのような気がする。いつの間にか彼女の柔らかかで温かい雰囲気感化されていったのだろうか。エアリスの優しい笑顔が、クラウドの脳裏を掠めた。

それを、ティファは恋だと言いたいのか？

…そんなことは…判らない。判るわけ、ないじゃないか。

まるで自分自身に言い訳をするように、クラウドは眼を閉じた。だがいつまでもここで葛藤している訳にはいかない。舞台を見なければ。いつジタン四世が乱入して来るか、判らない。気を抜く訳にはいかない。

クラウドは大きく深呼吸すると、眼を開けた。

舞台が暗転した。

そして、ここから大道具の仕事は始まる。今までのセットを人海戦術で撤去。すぐに次の場面で使う、王城のテラスを袖から持つてくるのだ。真つ暗な中、大人数が息を潜めて黙々と仕事をこなしていく。観衆はその間、今まで流れていた時間の束縛から一瞬解放され、流れを積み重ねとして再構築する。幕間は一種の息継ぎなのである。

そして、その息継ぎが今、終わりを告げた。

ワツと起こる歓声。観客のお目当ての登場。無論、それは本物のガーネットではなく、変装したティファではあるのだが。盛大な拍手に迎えられ、マリアとなったティファはゆっくりと階段を登る。まるで本物の石で出来ているかのような精巧な造りのテラスだ。作成者のレベルの高さが伺える。ティファ扮するマリアが純白のドレスを翻して階段を登っている間、照明が彼女だけをライトアップし、煌びやかな光を放つ衣装が彼女の動きに合わせて優雅に揺れた。

『西軍は敗れ、マリアの城は東軍の支配下に置かれた。』

東軍の王子ラルスとの結婚を強いられたマリアはドラクウへの想いを捨てきれず、

毎晩夜空を見ては恋人を想う……』

ナレーションがマリアとドラクウの悲恋を彩る。

音楽団の指揮者が、タクトを振り上げた。マリアがテラスの最上段に足をかけた。

…瞬間、マリアを照らしていた照明が少しの間消えた。闇に包まれる舞台。

「…？ ミスか？」

ヴインセントが呟いた。何だかんだ言って、彼もこの劇に関心を示していたようだ。

些か不自然な照明の消灯に、一抹の疑念がよぎる。

だが、すぐにライトが灯された。マリアは既に、テラスの端ギリギリのところまで歩いていった。

それを見計らい、指揮者が演奏を開始する。美しい音色が、哀愁を帯びた旋律を奏でた。

「や、やべえ…本気で唄わせるつもりかよ！ デイオの奴！」

バレットは思わず耳を塞ごうと両手を持ち上げていた。息を呑む場内。

そして、音楽が最高潮に達し、漣が引く如く一旦フェードアウトし、マリアへバトンを渡す。

マリアは眼を閉じ、息を吸い込んだ。

いとしの あなたは とおいところへ？

鳥肌が立った。彼女から響いてくる旋律の波動が、その場の全員を身震いさせたのだ。

「?!?!?!?!」

「おい…何の冗談だ…？ こりゃあ…」

バレットとシドは言葉が出ない。

いろあせぬ とわのあい ちかった ばかりに…

「う、上手い…」

レッド??は思わず声を漏らす。

「ばか…レッド…コレ、上手いなんてモンじゃないよ…」

ユフィはもう舞台上から眼を離すことが出来ない。

マリアは胸に手を当て、心の底から唄う。観客へ向け、魂を叫ばせる。

かなしい ときにも つらいときにも
そらにふる あのほしを あなたとおもい

波動がビブラートによって増幅され、聴く者全ての聴覚に、いや、心に訴えかける。もはやこれは唄ではない。これこそが、“魂の叫び”と言えるのではないだろうか。心がざわめいて、震えが止まらない。

すると、それまで黙っていたヴィンセントがハツとして口を開いた。

「…エアリス？」

「ええええ!？」

「ほ、ホンマや…この声、エアリスさんやないですか?!」

ケットも、この唄の主が誰であるか判ったようだ。

のぞまぬ ちぎりを かわすのですか? どうすれば? ね
えあなた? ことばをまつ…

「ななな?!」

「あつ! 良く見たら微妙に前髪が分けてある!」

眼を細めて良く見なければ判らない程度だが、確かに先ほどまでの役者であるティファとは相違点が見受けられる。髪の毛は完璧に

ストレートになっており、鴉の濡れ羽色であるティファの髪の毛と同じくつやつやと輝いている。ほんの少し、前髪に癖が残っていたのだ。

「わあ、やっぱり上手、エアリスさん」

突然聞き覚えのない声が響いたので、全員の視線が一瞬でそちらへ集中した。

見れば、クラウドの座っていた席にひとりの女性が腰掛けている。

「わっ！？ ガーネットさん！？！」

ユフィが驚いて飛び上がった。ガーネットはこくりと頷き、一同を見渡す。

「安全な場所へ逃げたんちゃんですか？！」

慌てふためいてケット・シーはガーネットに尋ねた。

「灯台もと暗しって言うじゃないですか。ジタンも、まさか観客席にいるとは思わないでしょ？」

「それより、これはどういうことだ？ 最初の女は、紛れもなくティファだったはず……」

ヴェインセントが疑問を投げかける。それは即ち、一行の疑問でもあった。

歌姫はにっこりと微笑んで答える。

「唄のときだけ…交代させる?!」

控え室では、クラウドがディオに驚愕の表情を向けていた。

照明が消え、不審に思ったのも束の間。誰かが移動しているような衣擦れの音が入り、次の瞬間再び照明が灯された。そこに見えたのは、確かに女性の後ろ姿。だが、それはティファのものではない。いつも見ているから、それは判る。その声に聞き覚えがあった。唄自体は聴いたことはなかったが、この優しく透き通るような美声は、紛れもなくエアリス「ゲインズブル」のものに間違いなかったのである。

「その通り。彼女から提案があったのだよ。唄は自分が何とかしてみせるとな」

「馬鹿な…そんな交代がいつ…」

そこでクラウドは全てを悟った。あの照明の消灯は、ミスではなかったのだ。一瞬でティファとエアリスを交代させる、“間”を創り出すためのものだったのである。そう考えれば、観客席を数列空席にしたのも合点がいく。余り舞台に近すぎれば、ひよっとすると誰かが入れ替わったことに気付いてしまいかも知れない。だが、あの距離ならそう簡単には判らない。ましてや薄暗く、姿形を瓜二つにまで似せてあるのだ。完璧な作戦と言わざるを得ないが、何とも危険な作戦であるとも言わざるを得ない。

「この24時間、エアリスくんには少女に変装してもらっていたのだよ。一流のスタイリストに依頼し、

何もかもが少女とそっくりになるよう念には念を入れ、苦心を重ねたんだ。

しかし、彼女の前髪だけはどうしても真っ直ぐにパーマがかからなくてなあ…。

何しろ彼女の髪は癖が強くてね。かなり時間をかけたというのに、あれだけはどうにも…」

「24時間!？」

「おっと、彼女の名誉のために付け加えておくが、勿論それだけのために留守にしていた訳ではない。

彼女は極秘裏にこの作戦を遂行するため、独りで唄の練習も兼ねていたのさ。

敵を欺くにはまず味方から。本当に頭のいい娘だ。彼女は…」

「…くそ…何て無茶で…勝手に…」

胸のしこりが、取れた。

「綺麗なんだ…?」

24時間分の心配が、どこかへ吹き飛んでしまったようだ。今マリアは唄の佳境に差し掛かっている。夜空を見上げた彼女が、空にドラクウの幻を見付ける場面だ。

ドラクウの幻は実際にブランクが演じる。細いワイヤーで吊り下げられたドラクウを見付け、マリアが幻でも構わないとダンスを踊る。ここでの交代はないらしい。照明は、マリアを演じるエアリスを明るく照らし出したままだ。

『さあ…マリアよ私といっしょにステップを…』

マリアはドラクウの手を取り、オーケストラの演奏に合わせてステップを踏む。

完璧である。

優しいなマリアの表情がライトアップされる。観客席からは、見えないだろう。それがクラウドには気の毒でならなかった。正に女神の如き微笑みを、彼らは見ることに叶わないのだから。

「彼女の上手さには、正直私も驚いた。プロであるガーネットやクジヤまでが驚嘆していたよ」

「知らなかった…俺、エアリスがこんなに…」

まるで別人のように舞うエアリス。美しくはためくスカートに施された宝石が、虹の如く輝く。

「さて、登場してからここまで、本当の替え玉である少女の出番は少なかったが…」

ディオはクラウドから離れ、ネクタイを締め直す。少女というのは勿論ティファのことだ。

ティファが少女でエアリスがエアリスくんである判断基準は、定かではない。

「次のラルスとのダンスシーンは完全に少女の仕事だ。そこからだいぶ経ってから、

ドラクウが西軍の生き残りを伴って乱入してくる。そこで…」

「唄のシーンか」

「その通り」

「その唄が終われば、もうマリアには唄のシーンはない。台詞ばかりさ。エンディングまでは直線だ」

「ジタンが現れなければ、な」

「無論、その通り」

クラウドはもう一度、艶やかなエアリスを見る。この光景を、眼に焼き付けておきたかった。

『はははは…』

楽しそうに笑い、ドラクウの幻影が去っていく。去り際に、彼は手にした花束をマリアに投げた。

それをキャッチし、マリアはドラクウが消えた空を切なそうに見つめる。

このシーンの、クライマックスだ。

ありがとう わたしの あいするひとよ

クラウドの胸が、思わずきゅっと締め付けられた。今これを見ている男性は、全員そうだったのだろうか。

自然と、胸の奥が熱くなる。心地良い熱は、そのままゆっくりと身体を登り、彼女の姿を映している眼の辺りで蓄積していく。

いちどでも このおもい ゆれたわたしに…

クラウドはエアリスが六番街の公園で語ってくれた初恋の男の話を、何故か思い出していた。

あのときの表情と、今のエアリスの表情はどことなく似ている。言葉で伝えられる悦びと、小さじ一杯分の悲哀を秘めた彼女の顔は、この世界の何よりも美しく見えた。彼女にこんな顔をさせるその男とやらに、行き場のない嫉妬を抱いたことが鮮烈に思い出される。自分は、エアリスのことをどう思っているのだろう。ティファに言われるまで、気付かなかった。

自分の心に不正直なものと、心の内に秘めることは本質的に違う。恐らく、今自分は前者なのだろうとクラウドは思う。何と不格好で、刺々しいのだろうと。

花束を抱き、マリアがテラスから身を乗り出す。

しずかに やさしく こたえてくれて いつまでも いつまでも
あなたをまつ…

マリアが花束をテラスから投げた。花弁が舞い、美しい軌跡を描

いて重力に従ってゆく。
胸の前で両手を組み、祈るようにマリアは眼を閉じた。

『ラルス王子がお探しです。ダンスのお相手を…。
もうお諦め下さい。我が国は東軍の属国になってしまったのですから…』

大臣が城の中から現れ、マリアに告げた。

マリアは切なげな表情を夜空に向け、大臣に手を引かれて城の中へと入っていった。

同時に指揮者が音楽を止めた。美しい余韻が、ホールへと吸い込まれていった。

怒号のような歓声。拍手喝采などというものでは生温い、格闘技の試合でも観戦しているかのような歓声だった。指笛は止まることをしらず、中には涙を流す者も散見された。

VIP席の仲間たちも、精一杯の拍手を送る。この瞬間だけを考えば、全員当初の目的であるジタン四世捕獲を忘れ果てていたに違いない。イベントスクエアは今、創設以来起こったことのない奇跡のような出来事で溢れていたのだった。

「…良くやった。エアリス」

袖で眺めていたクラウドは、心底エアリスに対して敬意を抱いていた。彼女がいなければ、この作戦は当然失敗していたに違いない。

いや、それどころか発案すらされなかっただろう。

彼女の唄の余韻に浸りながら、クラウドは舞台に背を向けた。既にディオは消えていた。クラウドも席に戻ろうと、入ってきたと同じドアへ向かう。

「？」

途中、違和感を覚えた。清掃が行き届いた床に、一枚の紙切れが落ちている。観客席の方へと通じるドアの傍だ。今そのドアはロツクされ、向こう側からは開くはずがない。

異物はどうしても視界に潜り込んでくるもので、クラウドにはそれがただのゴミであるとしても思えなかった。日頃からこういう感覚でいつも損をしている。感知しなくてもいい波動を拾ってしまふ。ここまで来ると、それはもう危険回避能力とか虫の報せなどというプラスの方向へ進む力ではないように、クラウドは思ってしまう。厄介ごとを内包した意地の悪い神の悪戯か、それとも…。

しゃがみ込み、それをつまみ上げる。乱雑に折られた、気にしなければ本当にゴミで済みますことが出来るであろうものだ。だが、今のクラウドにそれは出来なかった。ゆっくりと、折り目を伸ばしていく。心なしか、指先が震えているように感じた。

お前ら気に食わんから、オペラの邪魔してやるけんね。ほひほひ。

ドン＝コルネオ

「…あんの豚がああ…！ ダチャオ像から落ちても生きていやがったのか…！！」

ぐしゃりと紙切れを握り潰し、怒りに燃えた眼でクラウドは自分の拳を見つめた。

ドン＝コルネオ。

ユフィにマテリアを盗まれるという事件の最中、そのユフィとタクスのイリーナを捕らえてウータイのダチャオ像に吊し上げた変態。更に溯れば、ウォールマーケットでエアリスとティファを差し置いて、事もあろうに男であるクラウドに迫った大変態。いや、馬鹿である。

…。
思えば長い付き合いになったものだ。まだ付きまってくる気が…。

クラウドは七代崇るといふ蛇を連想したが、どうにもあの男の体型からして豚しか浮かばない。その執念深さで、この劇まで台無しにするつもりらしい。ジタン四世の件もある。問題がふたつに増え、クラウドは軽い目眩を覚えた。

「…くそ、とにかくディオに報せないと…！！」

クラウドは脱兎の如く控え室を飛び出し、どこかにいるはずのディオのもとへ走った。

「何ですと〜〜?!」

想像以上に疲労してしまった。思わぬ障害の発生で心身共に緊張の糸が張りつめているせいだ。

くしゃくしゃに丸めてしまったメモを見せる。デイオは眼が飛び出さんばかりに驚き、慌てふためいた。劇の邪魔をしようとしている者ならば誰であろうと要注意の例外ではない。仲間たちも、その文面を覗き込んで緊急事態であることを悟ったようだ。一瞬にして表情を硬くする。

一方、劇はラルスとマリアのダンスが行われている。他にも舞台には、美しく着飾った貴族役の役者たちがそれぞれ音楽に合わせて踊っていた。満面の笑みを浮かべながらステップを刻むラルス役のクジャ。そして、演技なのか本当に嫌なのか定かではないが、いかにも憂鬱そうな表情でそれに従うマリア役のティファ。再びマリア役はティファ＝ロックハートへと移っていた。

オーケストラがワルツを奏でる。優雅な調べに、観客たちもうっとりしていることだろう。

その少し上のVIP席では、そんな典雅さなどお構いなしに、色気のない紙切れを全員が覗き込んでいた。

『西軍の生き残りが攻めてきた!!』

シナリオは更に進む。一時停止ボタンはどこにもない。

兵士が華やかなダンスの席に乱入してきた。突然、音楽が転調する。踊っていた貴族たちの視線が、一斉にその兵士に注がれた。

『何! !』

ラルスが驚きの声を上げると同時に、舞台袖から鬨の音が響いた。

『かかれ~~~~ツ! !!』

一斉に飛び出す、西軍の生き残り兵たち。

ガシャンとガラスが割れる効果音が響き、大勢の足音のエフェクトが流れる。

すると、逃げ惑う貴族たちがラルスとマリアをわざわざ取り囲むようにして走り回る。相当な人数なので、ふたりはすっかり隠れてしまった。ダンス会場は一瞬にして戦場と化した。貴族たちの悲鳴がそこかしこに響き渡る。人の流れが一段落すると、ラルスとマリアの姿が再び現れた。観客にすれば、全く不自然な立ち回りではない。

直後に現れたマリアは別人に変わっていたのだが、勿論それに気付く者はいない。

反対の袖からは東軍の兵が、これを迎え撃つために現れた。

マリア役のエアリスを自分の後ろに隠し、腰の剣を抜くラルス。

…と。

『待て!』

東軍の兵士たちを蹴散らし、チヨコボに乗ったドラクウ役のブランクが颯爽と登場。本当にチヨコボに蹴飛ばされる役者たち。迫真の演技に、観客からも小さな悲鳴が上がる。

ドラクウはチヨコボから飛び降り、ラルスと向き合う。因縁の対決だ。

マリア

ドラクウが低く、雄々しい声で唄う。マントの後ろに隠されていたマリアがラルスを振り切り、応える。

ドラクウ このひを しんじてた

求め合う恋人たちの中に立ちはだかる、ラルスという名の壁。

マリアは このわたしの きさきになる べきひとだ

ドラクウに向け、威嚇するように唄うラルス。やはりプロだ。演技中は別人である。

マリアに向けていた優しい眼差しを、熱き闘志の宿る双眸に変えたドラクウが返す。

いのち つきはてよう とも はなし はしない

ラルスの眼が煌めく。いよいよ物語も大詰めだ。

けつとうだ！

これをきっかけに、曲が速いテンポのものへと変わる。一斉に剣を抜き放つ、西軍と東軍の兵士たち。それぞれが決められた相手と向かい合い、準備が整う。

一拍置いて斬り込んだのはラルス。ドラクウの剣と彼の剣がぶつかり合った瞬間シンバルが打ち鳴らされ、決戦の幕は切って落とされた。堰を切ったようにチャンバラが繰り広げられる。舞台上では目まぐるしく剣が舞う修羅場が展開され始めた。

「しかしそいつはどんな恐ろしい方法で芝居を邪魔しようとするのか？」

VIP席でディオは腕を組み、考え込んだ。攻めてくる方法が判らない以上、対策も練ることが出来ない。クラウドたちも唇を噛む。ふと、ディオが舞台の上の方を見上げた。

「…！ あれを…！！」

そして、一点を指差す。下方の全観客とは全く違う方向を、VIP席の者は全員見上げた。

「ほっひっひ…マリアの上にオモリ落としてやるもんね！」

舞台上、無数の鉄骨が張り巡らされ、縦横無尽にロープやワイヤーが張り巡らされた場所。ここから舞台までは二十メートルはあるうか。相当な高所で、その小太りの男は額に汗を浮かべながら暗幕を吊り下げておくための巨大な重りの前に立ってにやついていた。

汗を一拭きすると、その男…ドン＝コルネオは、遙か下方に見えるマリアに狙いを定めた。そして、ありったけの力を込めて踏ん張り、重りを押す。ずりつと音がして重りが鉄骨から滑り落ちる…はずだった。

「んが〜！ 予定より重い！ こりゃ落とすまで5分かかるウ！」

正確に落下予測時間を計算出来る理由は判らないが、その重りは重さ一トン近くある暗幕を吊り下げておくためのものである。普段運動もしない中年の男が、そう簡単に落とせるほど軽くはなかった。しかし、それでも確実に重りは動く。これがもし人の頭に落ちたら…。
見上げた一行は背筋が寒くなった。

「セコい真似を！」

クラウドが歯を食いしばり、拳を握り締める。ディオが叫ぶ。劇が相当騒がしい状態なので、観客には届かないだろう。

「右の部屋のウラカタさんに声かけてみたまえ！ 舞台上に行けるはずだ！！」

「任せる！！」

「アタシも行く！！」

「私も行く」

ユフィとヴィンセントが名乗りを上げた。クラウドは頷き、残る者に言う。

「みんなは待機していてくれ！ もしもジタンが現れたら大変だからな！！」

「おう！ ここは任せるイ！ さっさと行きな！！」

シドが胸を叩いた。「急げ！ グズグズしてると、エアリスが煎餅になっちゃうぞ！！」バレットも三人を促す。クラウド、ユフィ、ヴィンセントは、コルネオの陰謀を阻止すべく駆け出した。

オーケストラの奏でる猛々しい旋律。

指揮者が一心不乱に降り続けるタクトは、クラウドたちの鼓動をエスコートしているように見えた。

t o b e c o n t i n u e d

後編

愛しのあなたは 遠いところへ
色褪せぬ永久の愛 誓ったばかりに

悲しいときにも 辛いときにも 空に降るあの星を あなたと想い
望まぬ契りを 交わすのですか

どうすれば ねえ あなた 言葉を待つ

ありがとう 私の愛する人よ
一度でもこの想い 揺れた私に

静かに優しく 答えてくれて

いつまでも いつまでも あなたを待つ

A r i a D i M e z z o C a r a t t e r e
V e r . F F ? 後編

廊下を抜け、舞台裏の装置を担当するウラカタがいる右の階段を駆け上る。階段が終わるとそこに梯子が現れた。構造的に、舞台を見下ろすような場所にウラカタはいるのだろう。三人は一気に梯子を登る。思ったよりも長い梯子だったので、もどかしさがその分募った。

「ウラカタは!？」

登り切った直後、クラウドは部屋の中で叫ぶ。

中では、ひとりの青年が眼をぱくりしていた。確認の必要もないだろう。彼がウラカタだ。

「な、何事だ？」

「説明してる暇はない！ 大至急舞台の上…鉄骨の上に行きたい！」

「何だと?! 今公演中だぞ!? そんなことが…」

「あゝもう!! デイオの命令だつてば!」

ユフィが息を切らせながら口を挟む。「デイオの…」ウラカタは考え込んだ。しかし、この三人が本当にデイオの使いだとすると、どうやら事態は一刻を争うようだ。それほどまでにこの三人は鬼気迫る表情でウラカタを見ていたのだから。

「…デイオの命令か。そこにある、一番右のレバーを下に入れる」

ウラカタはヴィンセントの傍にある、三つのレバーを指差した。ヴィンセントがそれを下方に押し込む。

「それでこの部屋の反対側にある左の部屋から舞台上に行けるはずだ」

「よ、よしっ！！ ふたりとも、行くぞー！！」

クラウドはすぐに梯子を飛び降りた。

「ど、どもっ！ 失礼しました〜！」

ユフィはウラカタに一礼すると、すぐにふたりに従う。

今度は反対側だ。先ほどVIP席から降りてきた階段を横目に、三人は疾駆する。こうしている間にもコルネオは重りを動かしているのだ。もう一刻の猶予もない。

階段を登ると、ウラカタの言った通り小さなドアがあった。ほとんど蹴破るようにしてそれを開けると、現れたのはまたしても梯子半ばうんざりしながら、クラウドは地を蹴った。驚異的な跳躍力で一気に梯子の中盤あたりを掴む。猛烈な勢いで、そのまま登る。

「うえ！？ ちょっと！ 待ってよクラウドー！！」

既に梯子を登り終えようとしているクラウドを目の当たりにし、ユフィは小さく悲鳴を上げた。

「グズグズするな。行くぞ」

ヴィンセントも跳ぶ。まるでワイヤーアクションのように、彼も真ん中あたりの梯子を掴むとクラウドの後を追った。溜息をつき、

ユフィは普通に登ろうと一番下に手を掛ける。

ふと、一旦手を止めて舞台が見えないかと薄暗がり眼をこらした。

どうやらここは、出演者たちが次の出番を待つ控えている舞台袖の、真上に位置する場所のようだ。コンクリートで出来た足場の淵に立って見下ろすと、数十人ほどの出演者の頭が見える。ここでも、相当高い。あのとき、ウータイのダチャオ像に括り付けられたときの高度からすれば可愛いものだが、それでも彼女は血の気が引くのを感じ得なかった。察するに、エアリス扮するマリアはこの丁度反対側にいるのだろう。なんとまあ、行ったり来たりでこっちがウラカタじゃないかとユフィは思った。

上を見上げると、既にクラウドとヴェインセントが拳ぐらいの大きさになってしまうている。慌てて彼女も梯子を登り始めるのだった。

「…暑いな！」

先頭に行くクラウドは、明らかな気温の上昇を感じ取っていた。

熱気は上の方に集まる。真下で演技している役者たちの熱と、それを熱心に鑑賞している観客たちの熱が一気にここに流れ込んでいるのだ。額の汗を拭い、クラウドは更に登る。それにしても高い。ここまで高くする必要があったのだろうか、どうしても思ってしまった。そんなこんなで、クラウドはすっかり頭に血が上っていた。

ほとんど無理矢理、こんな仕事に付き合わされた。

すっかり自分は蚊帳の外で、エアリスやティファたちが何やら画策しているのが面白くない。

クジャとかいう男の好色にも腹が立つ。

思えばここまでずっと引きずられっぱなしだ。

ティファの発言も気に掛かる。

拳げ句の果てにあの豚の登場。ジタン四世。ディオ。
みんな勝手だ。

「オノレ……」

クラウドが何やら呟いた。

「コノウラミ、ハラサデオクベキカ……」
「何？」

下でヴィンセントが首を傾げる。
遂に狂ったか、クラウド。

「コルネオおおー!!」

鉄骨の上に躍り出るや否や、クラウドは剣を抜いた。彼の装備が陸奥守吉行だったのは、不幸だったかも知れない。この狭い場所で長尺を誇る刀はその威力を存分に発揮出来ないからだ。だがそんな些末なことは、リミットブレイク中のクラウドには関係なかった。もしも電気配線などが邪魔だったら、今のクラウドは何の躊躇もなくぶった切るだろう。

刀を振りかざし、阿修羅の如き形相で自分を睨む金髪の男がドン
「コルネオの視界に映り込んだ。見覚えのある顔に、彼の作業が一時停止する。」

「ほひゃ〜!?!? で、出たなオカマめ!!」
「オカマだとう〜〜!!?!?」

所々穴の開いた鉄骨の上にも関わらず、クラウドはどんどん歩を進める。一步踏み外せば真逆様だ。依然として下方からは戦いの

音楽が聞こえてくる。心なしか音源が遠い。それだけ、ここが高い位置にあるということだろう。舞台の上を闊歩する役者たちの姿は、とても小さく見えた。

ヴィンセントが頂上に辿り着いた頃、既にクラウドはコルネオのもとへと斬り込もうとしていた。余りの躊躇のなさに、ぎよっと身じろぐ。

「クラウド、ま、待てッ!!」

「ゆる〜さん〜!!」

(完全に正気を失っている…そういうえば、あいつこの数日寝てないな…)

やれやれと肩をすくめ、自分も鉄骨の上に足を出す。

「うっ!?!」

そのとき、鉄骨の隙間から下が見えた。とんでもない高さだ。もしこの上から落下するようなことがあれば…。そして、あの重りがこの高さから落ちたとすれば、その衝撃は一体…。

「…でもまあ、この高さで正確にエアリスを狙うことが出来るとは思えないがな」

腰から銃を抜き、ヴィンセントはクラウドの援護に回る。

コルネオはだらだらと際限なく流れる汗を拭い、必死で打開策を練った。金髪の死神が、一歩ずつ近付いてくる。下の音楽も、コルネオの焦りを誘う。ぶるぶると震え出す。窮地だ。

「うぐぐ…おによれ〜!!」

「ふへへへ…コルネオ…今度という今度は許さんぞ〜!!」

完全に人格が変わっているクラウド。狂気を湛えた眼が、妖しく
コルネオを射抜く。

「ほひ、お前：本気だな。偉い偉い…。俺もふざけてる場合じゃね
えな」

「その台詞はもう聞き飽きた」

ゆつくりと刀を構え、攻撃態勢に移る。コルネオは不敵に笑む。

「てめえ、よくも俺の可愛いアプスとラプスを殺してくれたな…。
これ以上邪魔されちゃあたまんねえ！ここで消してやる！！
ってなわけで俺のペット第三号と遊んでもらうぜ！！」

コルネオが、ぱつと懐から小さなカプセルを取り出した。

「オルトロス！カムヒア！！」

鉄骨の上に投げつけられたカプセルが、噴煙と共に爆発した。煙
に巻かれ、視界が遮られる。

援護役のヴィンセントも、この煙では銃が撃てない。流れ弾がク
ラウドに当たってしまうかも知れないからだ。一瞬煙に気を取られ
たクラウドの横から、突然何かが彼の首に巻き付いた。

「！？」

物凄い力で締め上げられ、言葉さえ発することが出来ない。その
うちに何かはクラウドの四肢の自由まで奪う。腕、足、そして身体
全体が拘束されていく。

「ぐ…あ!？」

「ほひひ!! 死ね! しねしねしね!! オルトロス!! そいつを絞め殺せ!!」

そのとき、どこからか凄まじい風が吹き荒れた。ここは室内。風など起こるはずはない。コルネオは驚いて辺りを見回した。

「ななな?!」

煙が全て吹き飛ばされ、クラウドに巻き付いていた何かの正体が明らかになる。

鉄骨の隙間から、忍者ユフィが元気良く飛び出した。

「間に合った?!」

「遅いぞ!」

銃を構え直し、ヴェンセントはその何かに狙いを定める。ユフィも、“巨鳥の羽”を出したバツクパツクを閉じて武器を構える。風属性のアイテムを使ったのだ。

「!?!」

「た、タコ?!」

巻き付いているのは、紛れもなくタコの足だった。そして、クラウドの背中 of 辺りからその顔が現れる。その大きさをや、並みのタコの十倍はあろうか。それも、少しばかり常軌を逸したような構造のタコである。タコ特有のあの口の代わりに、立派な歯が生え揃った見事な口が歪んでいる。淫猥な笑みを浮かべ、タコはクラウドを締め付ける力を強めた。

『ひさしぶり…また出たよ。待った？ 待った？』
「ぐ…俺は、お前なんか知らん…！」

気合い一発、クラウドはタコの足に噛みついた。予想もしない行動に、驚きを隠せないオルトロス。一瞬クラウドに対する締め付けが緩んだ。「うらあっ…！」刹那、刀が乱舞する。

『いで……!!』

斬りつけられたオルトロスが一旦離れる。首には痣がくつきりと残っていた。機を逃さず、ヴィンセントとユフィがクラウドと合流して態勢を整える。

「ほひひひ…このオルトロスはただのタコじゃねえぞ！ 何しろこいつは俺様が直々に改良…」

コルネオが言い終わらないうちに、いきり立ったクラウドが形振り構わず躍りかかる。

「が……!!」

「ほひゃ……!!」

クラウドの詠唱したファイガの炎に、オルトロスが一瞬にして包まれた。

「あ…の馬鹿！ ここがどこだか完全に忘れてる…！」

熱風を防ぎながら、ヴィンセントが呆れる。

「わあっ…！ ちょっとちょっとおおお…！」

ユフィの悲鳴を聞いたヴィンセントは、オルトロスがゆっくりとバランスを崩して鉄骨の上から落ちそうになっている光景を目の当たりにした。

「ぎゃーーーーーーーー！！」

「わーーーーーーーー！！」

ほとんど泣きそうになりながら、ふたりは雷鳴の如き速さで駆け寄り、オルトロスの足を掴む。彼が普通のタコでなくて助かった。足は、ぬめぬめと湿ってはいない。心なしか、こんがりと香ばしい匂いがした。

『今日もだめだったか…。タコですみません』

「お、お、お、重いーーーー！！」

「クソーーーー！！ 役に立たないペットを飼うんじゃないッ！！」

これが落下すれば、間違いなく劇は台無しだ。それを防ぐべく、ふたりは渾身の力を込めてオルトロスを支える。下には未だ戦のシーンで蠢いている人々。

ぶらぶらと舞台の上で規則的に揺れるタコの姿に、気付く観客はいなかった。

「うふふふ…さあ、追いつめたぞコルネオおお…！！」

ぐっと刀を握り直し、酔いが回ったような眼でコルネオを睨むクラウドは、もう誰が見ても正気ではなかった。極度の睡眠不足とストレスが彼の思考をすっかり埋め尽くしてしまっている。

オルトロスを難なく撃退されたコルネオは、落とそうとしていた重りの方へ逃げる。

「ちよ、ちよっと待った！」
「黙れ！」

鉄骨の上でドン＝コルネオは、物乞いでもするような表情でクラウドを見ています。

「すぐ終わるから聞いてくれ！
俺たちみたいな悪党が、こうしてぺこぺこ敵に頭を下げるのはどんなときだと思っ？」

- 1 死をかくごしたとき
 - 2 勝利を確信しているとき
 - 3 なにがなんだかわからないとき
- さ、さあ…このみつつのうちから選択してちょーだい！」

にたりと笑ったクラウドが、間髪入れずに答える。

「イチバンに決まってるんだろ〜がああああっ！！」
「ほひ〜！ おっし〜〜！！！」

振り下ろされたクラウドの刀を間一髪でかわし、コルネオは何を思ったのか重りの上に飛び乗った。

「！？」
「どうせ殺されるなら…あのおなごは道連れじゃ〜！！」
「何だっ！！！」

次の瞬間、コルネオの肥えた身体が宙に躍った。一瞬勝ち誇ったような笑みをクラウドに向け、その身体は下方への重力に乗った。自らの肉体を凶器と化したのである。

「クラウド！」

「くそっ！ 往生際の悪い……！！」

ヴィンセントとユフィは勿論、手が離せない。

クラウドは歯を食いしばり、上を見上げた。天井まで、ほんの数メートル。クラウドは意を決し、自分も重りの上に飛び乗った。コルネオはこのまま下へと落ちたが、クラウドも同じようにしていたのでは追いつかない。彼は重りを力一杯蹴った。そして空中で身体を回転させると、天井に身を屈めるように着地する。この場合、着地とは言わないのかも知れないが。

そして先に落ちたコルネオに照準を合わせ、彼は天井を蹴った。

「わああっ！！？」

「何でそういう結論に至るんだいつも……！！」

ユフィとヴィンセントの悲鳴が後ろで聞こえたと思った瞬間、クラウドの身体は鉄骨の隙間から猛スピードで消えていった。

「おい……何だあれ」

最初は見間違いかと思った。VIP席のバレットは、不意に舞台の上の方から降ってきた塊を指差す。その塊はエアリス目掛け、真っ直ぐに落ちてくる。

「ぎゃ~~~~~!!」

ディオは頭を抱えた。だが、悲劇は終わらない。

「ええ!?!」

今度はレッド??が驚きの声を発する。先に落ちた塊を追うように、恐ろしいスピードで更にもうひとつの塊が降ってきたのだ。二つの塊に、一行は見覚えがあった。

「コルネオに…クラウド?!」

観客も、ようやく異変に気付いた。そこかしこから小さな悲鳴が聞こえた。

「ほひイ?!」

驚いたのはコルネオだ。突然金髪の男が自分の隣に現れたではないか。

「おっ、お前…!!」

「くおおおおるねおおお!!」

クラウドが拳を引き絞る。恐怖に顔を歪めるコルネオ。

結論。

この男は、正気ではない。

「けきや〜!」

「ぐへ〜!」

見事にコルネオのミゾオチを直撃。衝撃で、コルネオの身体がエアリスへの軌道から外れた。

同時に、クラウドの身体も同軌道から離脱。

だが、ここでクラウドの身に異変が起こった。

何と…。

冷静さを取り戻してしまったのだ。

「あ

恐る恐る、上を見上げる。つまり、舞台の方を見る。

エアリスの身体はない。代わりにそこにあったのは…。

「…ひび…」

ああ。何てことだ…。

「…びび…くひび…」

俺としたことが、後先考えずに突っ走ってしまっ…。

「クラウド！ クラ…！」

頭を冷やそう。怒りは何も生まない。そうだ…怒りは何も…。

「クラウドっ!？」

眼が開いた。クラウドは、自分を見下ろす美しい女性を見た。彼女は小声で自分に話し掛けている。

エアリスだ。ようやくはつきりしてきた意識。しかし、彼女は何故小声なのだろう。

「…エアリ…」

「うわ…これ、やばくね？」

「完璧白目むいてるんだけど…」

ぎく。

クラウドは恐る恐る上半身を起こした。途端、自分目掛けて照明が集中する。

そのせいで一瞬見えた観客たちがホワイトアウトした。背筋がぞつとする。続けてクラウドは、倒れている人間が三人いることに気付いた。ひとりは自分の傍に転がっている。

ティファに向けた、あの薔薇色の笑顔はもう見るも無惨な状態である。そこには二枚目を台無しにして、だらしなく舌を出して白目をむいたラルス役のクジヤの哀れな姿があった。ぎよつとするクラウド。そして、そこから数メートル離れた位置に転がるふたつの屍。これも誰と誰だが、判ってしまったような気がした。

突然舞台上から響く笑い声。ぎよつとしたディオとティファが視線を戻すと、そこではクラウドが何故か観客に向かって大声で笑っていた。舞台の末端に立って。

「狂ったか…」

「あゝ、もおどうでもいいから早く何とかして…!」

上の方でオルトロスを支えているヴィンセントとユフィも半ば諦めていた。

クラウドは不自然な笑顔を一杯に浮かべ、ぶるぶると震える脚で何とか舞台に立っていた。

「エア…じゃなかった！ マリアをめとるのは、ラルス王子でもドラクウでもないッ!」

思いも寄らない発言に、ざわめきが一瞬収まる。クラウドは掌を掲げ、観衆にアピールする。

「この、世界一の大泥棒、ジタン様だア~~~~~!!」

「…!」

突然の台詞に、当のマリアは真っ赤になる。だが、ここは落ち着かねばならない。

これは演技だ。そう、何とか切り抜けねばならない。

でも…。

いつか演技じゃないその台詞、聞きたいな。そう密かに想うエアリスがいた。

…。

何だあれ。

これも劇の一環なのかしら？

え？ あれどう見ても素人だろ…。

ジタンってジタン四世のこと？ あんな顔だったっけ？

どうでもいいけど、今上から落っこって来たよな？

あの高さから落ちて、何で生きてるんだ？

ラルスとドラクウ、生きてるかな…。

ざわざわざわざわざわざわ…。

「あちゃ〜！ ヘタクソな演技しおってからにイ！」

「でも、いいかも知れないわ」

ティファが言う。心なしか、不満げだが。

「このまま演技続けましょうよ。ジタン対策のアドリブは大丈夫なんですよ？」

「いかんよ。それが出来るのは主役級のドラクウとラルスだけだ。ふたりとも伸びてる。」

脇役がしゃしゃり出て、マリアを争うのか？ それこそ劇は滅茶

「苦茶さ…」

（もう十分滅茶苦茶だと思うけど…）

「だア〜まア〜れエエ〜！！！」

むっくりと起き上がったのは、ドン＝コルネオ。

「げっ！？ まだ生きてたのか…」

いい加減にして欲しい。コルネオは頭に大きなコブを作っていた。いや、むしろコブだけで済んでいるのは絶対におかしい。それは勿論クラウドにも言えることだが、誰もそんなことには注意が向かない。

静まりかえった舞台上で、のびているクジヤの身体が無意味に痙攣した。

「われとて、ウォールマーケットのドンと呼ばれし男！！ オカマなんかには負けんぞ！！」

「お前としょーぶだツ！！ 決着をつけちやる！！」
「オカマって言うな！！！」

急展開（？）についていけない他の役者たちを後目に、エアリス扮するマリアが前に進み出る。

『ああ ドラクウ… わたしはいつたいどうしたら…』

観客、一瞬本当に劇の一部なのかと思う。

『ま　マリア　おれのよめさんになつてちよくだめ』

一瞬でその期待は打ち砕かれる。

「嗚呼！　もうやけくそ！！」

「ええ！？」

デイオは舞台袖から音楽の指揮者に言った。

「ミュージックスタートオ！！」

言われるがままに激しい戦闘の音楽を奏で始める音楽団。舞台上では、クラウドとコルネオが向き合っている。じりじりと距離を詰め、にじり寄るふたり。

勿論まともにぶつかり合った場合、コルネオがクラウドに勝てるはずがない。だが今自分たちは“劇”を演じている。普通に戦つてしまつては、劇は成り立たない。コルネオは、これを演技だとは思つていない。それをどう收拾するか、クラウドは必死で思案を巡らせていた。

「ほひひひ…死ね～～！！」

先手はコルネオ。

と！

「ほぶっ！？」

何か上から降ってきた。激しい地鳴りと共に、コルネオはその下敷きとなってしまう。

クラウドは呆気にとられていたが、降ってきたのがコルネオのペットのオルトロスだと悟ると、上を見上げた。そこではユフィとヴィンセントが申し訳なさそうに両手を合わせている。コルネオはもう、動かなかった。オルトロスは依然として香ばしい匂いを放っているが、生きているようだ。うぞうぞと触手のような足が主の意思に反して蠢いている。下敷きとなった主人の生死は定かではない。

「ジタ~~~~ン!!!」

「こ、今度は何だ?!」

一難去ってまた一難。

乱入者はアデルバートIIスタイナー警部。ジタン登場の報せを受けるや否や、舞台にまでジタン四世を逮捕しに来たのであるうか。舞台袖から躍り出たスタイナーが、手錠を投げる。

「うわっ?!」

それは見事にクラウドの右手を捉えた。長い紐で繋がった先には、スタイナーの腕。

「ジタ~~~~ン! 逮捕だあ~~~~!!!」

「ちよ、ちよつと待て! 俺だ! クラウドだよっ!!!」

「貴様は変装の名人だからなあ! 他の眼はごまかせても、この俺はごまかせんぞォ!!!」

スタイナーはロープを引き、クラウドを手繰り寄せると、その辺にあった柱に手錠の一端をかけた。

「ああっ！」

「ハハハ！ これでもう逃げられん！！ 本隊の到着まで、そこで大人しくしているんだな！！」

スタイナーは意気揚々とエアリスに近寄り、その肩に手を置く。

「もう大丈夫ですぞ、ガーネットさん！」

「あ、あの……」

エアリスもどうしたらよいか、今度ばかりは判らなかった。

「くそっ！ ややくしくしやがって……！！ これを外せッ……！！」

「やかましい！ 年貢の納め時だジタン！」

高らかに笑うスタイナー。

余りの急展開（？）に、観客は全くついていけない。

そのとき……。

「ジテア~~~~ン！！ 逮捕どうあ~~~~~~~~！！！！」

全員の視線がそこへ集中した。照明まで、そちらを向く。

「あ、あれ？」

啞然。

「お、お前…!!」

スタイナーは徐に自分の顎に手を当て、そして一気にそれをめくり上げた！

現れたのは金髪の少年の顔。いかついスタイナーとは正反対に見える、線の細い輪郭である。好奇心に満ち溢れた眼が美しく輝く。白い歯を見せ、少年は悪戯っぽく笑った。

ジタン四世だ!!

どこからともなく声が挙がった。騒然となるイベントスクエア内。

「何だかわかんないけど、こいつらが暴れてくれて助かったぜ！おかげで自由に動けたからな！」

手際よくエアリスの両手を縛り上げたジタンは、ぱちんと指を鳴らす。

するとそれを合図にするように、舞台の上の方からロープが下ろされた。ヴィンセントとユフィはそれを見ていたのだが、このロープは鉄骨のあるこの場所から下ろされたものではない。真正正銘、観客席の真上から下ろされたのだ。ゆらゆらと揺れるそれを、ジタンが掴む。

「約束通り、ガーネットはもらっていくぜ！」

瞬間、ロープが凄まじい速さで上昇を始めた。

「あゝれエゝ！」

拉致されるエアリス。ジタンは彼女がガーネットだと信じ込んでいる。

一瞬後には、もうジタン四世の姿は小さくなっていった。遙か上方の天井に、スポットライトが向けられる。そこには穴があった。そこから出たロープが、何者かによって巻き取られているのである。

「待てゝい！ ジタゝゝん！！！」

スタイナーが叫ぶ。

「あゝばよスタイナーのとつつあゝゝゝん！」

遂にその姿が、イベントスクエアから消えた。

「行くわよ、クラウドッ！！！」

「へ？」

呆気にとられたその場の空気の中で、ティファはもう動き出していた。「ふんが！」一瞬でクラウドの手錠を引きちぎる（！）と、ドレスをはためかせたまま舞台を飛び降りて駆け出していた。

「ちょっと…ティファ！？！」

クラウドも急いでそれに続く。

「俺たちもこうしちゃいらねえ！ ジタンを追っぞー！！！」

「多分あいつの飛空艇だ！！ 外で待機してるはずだぜッ！」

VIP席の人間も動き出した。バレット、シドを先頭に階段を駆け下りる。

残されたガーネット、やはり例に漏れず啞然。

舞台の上にはいたヴィンセントとユフィの姿はもうない。

“関係者”のいなくなったイベントスクエアは、全くの静寂に包まれてしまった。

「はっ！」

我に返ったディオ。もうどうにもならないことは判りきっている。だが、“オチ”はつけねばならない。エンターティナーとしての、意地がある。

「はいつ！ ミュージックナンバー34！！！」

指揮者が半ば反射的にタクトを振るうと、流れ出したのは名曲“闘牛士の歌”。

勇壮な音楽の中、ディオが舞台に躍り出て懐からマイクを取り出し、観客の視線を集めた。

『意外な急展開！ 大怪盗ジタン四世の偽物の妻になるかと思われたマリアは、

突如として現れた本物にさらわれてしまった！！！！』

ディオは喋りながらウラカタに合図を送る。即ち“幕”の合図だ。それも、“上”からの。

『ドラクウとラルスは目覚めるのか！ ドン＝コルネオの思惑は！！
そして、マリアの運命や如何に！！
マリアとドラクウ、パート2を乞うご期待イ~~~~~』

音楽、カットアウト。

高速で降りてくる幕。

名作、“マリアとドラクウ”。

終劇。

×××

だが未だ幕の下りない物語もある。

「オイ！ 見ろ！！」

「あれがジタン四世の飛空艇？！」

外へ出たバレットとシドが、イベントスクエアの屋根につけている飛空艇を発見。夜の闇に浮かび上がるその姿は、サーチライトに照らし出されて巨大な雲の如くそこに漂っていた。

すると、飛空艇がゆつくりと動き始めた。目的を果たし、離陸しようというのだ。ゴールドソーサー中の視線を一身に集め、飛空艇ヒルダガルデはイベントスクエアの屋根から離れようとしている。

「わっ！ 動き出した！！」

合流したティファとクラウドが歯ぎしりする。「このままじゃ、エアリスさんが…」表情は変化しないが、ケット・シーも気が気ではない。

「ちよっと！ アンタ！！」

「っひゃあ！？」

いつの間にかそこにいたユフィが、近くの係員に掴みかかった。ヴィンセントはその横でヒルダガルデを見つめている。

「ここで一番高い場所はどこっ？！」

「た、高い場所？」

「イイから早くッ！！ 飛空艇行っちゃうでしょッ！！」

「ゴゴゴゴゴゴ“ゴールドツリー”の最上階ですう！！」

係員の男性は何が何だか判らず、半分泣きべそをかいている。

「ゴールドツリー？！ それはどこだッ！！」

すぐにクラウドもユフィに加勢する。

係員が指差した方向を見る。

文字通り黄金に輝くこのゴールドソーサーは、全体的に“木”を模して建造された娯楽施設である。その枝々に様々なスクエアが設置されており、客は専ら木の内部を通ってスクエア内を移動するこ

となる。現在、クラウドたちがいる場所は丁度その木の中から出た部分で、ゴールドソーサーの全景が見渡せた。

ゴールドツリーというのは、このゴールドソーサーの最上部に存在する大展望台のことだ。イベントスクエアからは少し離れている。黄金色の外観が、“黄金の木”を彷彿とさせる。

「よし!」

「ちよつと待て〜ッ!! 何が『よし』なんだ〜っ?!」

係員を突き飛ばして走り出したクラウド、ティファ、ユフィ、ヴィンセント。その行動の意味することが判った残りの者たちは、慌てて後を追う。そろそろ付き合っても長い。彼らのしでかすことは、いつもクレイジーであることが身に染みて判っていた。

「バ、バレット…まさか…」

レッド???が、ぜえぜえと息を切らせて走るバレットに尋ねる。

「ちくしょ〜! 間違いねえ! あいつら、あのとっぺんから飛び移るつもりだあ!」

「やっぱし!」

ヒルダガルデは、もうイベントスクエアを離れ、チョコボレース場の真上を航行していた。

×××

「後でゆっくり可愛がってやるさ」

飛空艇ヒルダガルデ。

まんまと目標を盗み出すことに成功した（と思っている）ジタン四世は、満面の笑みを浮かべながらエアリスを客室のソファに座らせた。

飛空艇の中だとはとても思えない豪華で瀟洒な内装に、思わずエアリスも見とれてしまう。

「驚いたかい？ ここにあるものは全部俺のコレクションなんだ」

「これ…全部？」

眩いばかりに光り輝く宝石の数々が、所狭しとガラスケースに展示されている。その横の壁を見れば、どの美術書を見ても必ず掲載されている画家リルム・アローニイの最高傑作『マゴス爺さん』が豪快に笑っていた。敷かれた絨毯は、俗に“エボン文様”と呼ばれる古代幾何学紋様が刺繍されたものだ。恐らくは一千万ギルは下らない値が付いているはずである。

「どうだい？ このコレクションの中に、あんたも加わるんだぜ？」

「…私も？」

物と自分とを一緒にされたようで、エアリスは面白くない。「おっと」ジタンは笑う。

「あんたは特別だ。俺“だけ”の宝物にしてやるよ」

世界最大の貴金属メーカー“グリーンヴァ”のライオンモデルのネックレスを鳴らし、ジタンはエアリスの頬を撫でた。こういった類

の口説き文句には嫌悪感しか催さないエアリスは、全身に鳥肌が立つのを感じた。ふと、間近でジタンの顔を見たエアリスはおや、と思う。

「…あなた、何歳？」

「ん？」

「もしかして、十代？」

「ああ。そうだけど？」

「ええ〜っ?!」

エアリスは思わず叫ぶ。世界を騒がす大怪盗が、こんな子供だとは想像もしていなかったのである。同時に、“年下”であるということ、彼女の中にはジタンに対する根拠のない優越感のようなものが膨れあがってきていた。

「なあんだ！」

「…?」

「あつ、いえその別に何も！」

「おかしなお嬢さんだな」

「…おじよおさん？」

自分より年下の少年にお嬢さんと言われてしまった。確かに童顔ではあるかも知れないが、これでもれつきとした22歳の大人である。まだ飲酒も喫煙も禁止されているであろう(?)子供に、子供扱いされるのは鼻持ちならない。

無然としているエアリスに、再びジタンが話し掛ける。

「あなた…ホントにガーネットか？」

「!」

突然核心を突く質問が投げかけられる。勿論隠し通す必要はもうない訳だが、ここで自分がお目当てのガーネットではないとばらしてしまった場合、どうなってしまうのだろうか。

「…はい？」

「俺の見た写真じゃ、もっとところ…ガキっばいっていうか、お淑やかそうっていうか…」

「私がお淑やかそうじゃないっていうのッ!？」

エアリスは遂に反論した。攻勢に出たエアリスに驚きを隠せないジタン。一方のエアリスも、うっかり口を滑らせてしまったと後悔してみるが、覆水は盆に返らない。

今までよりも怪しむような眼つきで、ジタンはエアリスをじろじろ見つめた。

「な、何よ」

「…ふ〜ん。ま、いいか。別に本人じゃなくても」

「ハ?!」

「良く見れば、あんたガーネットよりも綺麗だな」

「?!」

ジタンがソファに乗ってきた。びくつと身を屈めるエアリス。ドレスからはだけていた脚を急いで隠す。

「名前は？」

「ガーネット！」

「はは、気の強い女は好きだぜ」

「!?!」

更に近付く金髪の怪盗。エアリスは身の危険を感じる。

「気が変わった。後で可愛がってやるつもりだったけど……」

不意にジタンがエアリスの唇に触れる。驚いてそれを払いのけようとするが、両手が後ろで縛られていることに気付いたただけだった。脚は自由に動くのだが、ここで自由に動かしてしまったらジタンからはドレスの中が丸見えになってしまう。

花も恥じらう乙女が、はしたない真似をする訳にはいかないわ…と心の中で声が聞こえる。

ジタンは不敵な笑みを浮かべたまま、唇を寄せる。完全にその気だ。

「やつ！ ちよつと待ってッ！」

真っ赤になって顔を背けるエアリス。ジタンは真顔でしばらくそうしていた。

「…はい、ちよつと待った」

「そそそそんなぁ！」

「何だよシラケるなぁ。言っとくけど俺、こつ見えても経験は豊富なんだぜ？」

「そ、それとこれとは話が別ッ！ こついつのは両者の同意があった初めて……」

「あー！ うるせー！ つべこべ言わないー！」

「ぎゃ~~~~~！ー！」

遂に押し倒される。柔らかいソファだ。自分がどこまでも落ち込んでいくような気がする。

本来ならこの役目はティファだったはずだ。だが、予定外の乱入

者のお陰で彼女との交代が遅れてしまった。当初の計画は全く狂わされ、恥ずかしいのを必死で堪えてアドリブで合わせたというのに……。

どれもこれもみんなクラウドのせいだ。クラウドが悪い。最低。大根役者。言語道断。

「やだあつ！ クラウドお……！！！」

その名を口走った瞬間、ジタンの手が止まった。うつすらと涙の滲んだ眼を恐る恐る開く。

「何だ、あんた……彼氏持ちかよ」

「はい？」

「だあ〜！ 萎えるぜ！ 萎える萎える！！ やってらんねー！」

「……あの？」

「俺は彼氏持ちの女とは寝ないことにしてんの！ だってやだろ？ 最中に別のオトコの名前とか呼ぶんだぜ？！ やってらんないって！」

ジタンは外しかけていたボタンを留め直し、ソファにどっかりと腰を下ろした。

「ちよつ、聞き捨てならないわ！ 私そんなこと言わないもん！」

「ああん？」

「さつきから聞いてればまだ子供のクセに大人ぶっちゃって！！」

ちよつと世の中ってやつをナメてるんじゃないの！？ 大怪盗とかちやほやされてさ！」

「おいっ！ ちよつと待てや！ 聞き捨てならないのは俺の方だッ！」

再びジタンがエアリスの方を向き、両者戦闘態勢に入る。

「俺が子供だと？ そんなガキみたいな顔して良く言うぜ！」

「ぬぁんですつてえ！？」

「はン！ 『私はそんなこと言わない』？ 笑わせんじゃねー！」

あんだそういうことしたこと一度もないんだろ！ 俺の眼はごまかせないぜー！！

「~~~~っ！！」

「大方そのクラウドとかいう奴だつて大したことないオトコなんじゃないの？」

「クラウドはあんだの三億倍カッコいいし優しいし強いわよッ！！
良く知らないのに勝手なこと言わないでッ！ 調子乗ってんじやないわよっ！！」

今に見てなさい！ クラウドが助けに来て、あんだなんかこつてんぱんにしちやつて、

あんだの死体にソース塗ってまるであんだの血管にソース流れてたみたいにしてくれるんだからッ！！

「……」

「……はー、はー、はー」

「……」

「……？」

「……」

「……??？」

「……更に気が変わった」

「は？」

「あなたは特別にしてやるよ。ホントの意味の“特別”だ。それだけ俺をこき下ろすからには、

とーぜん覚悟は出来てるんだろっな？」

(エエ~~~~？！ アルエ~~~~！？ もしかして火に油注いじゃった？！ 私!?!?!)

ジタンがゆつくりとエアリスに近寄る。先ほどよりも格段に大きな危険を感じる。

自業自得とは、彼女の名誉のために言わないでおきたいが。

「それに良く考えりや、“彼氏持ちの女を無理矢理”つてのも…ナカナカ萌えるシチュエーションだ」

「む、むりやり…？ もゑる？ しちゅゑゐしょん…？」

「さあて、多少の“おイタ”は覚悟しろよ…！！」

「いや…！！ 待って…！！！！ “ごめんなさ…！！”い！！」

『オイ！ ジタン！』

ドレスが半分脱がされたところで、室内に設置してあるスピーカーから太い男の声が流れた。中途半端にコトを中断してしまったジタンは、いかにも不満げな表情を浮かべながらエアリスを解放し、壁に掛けてあるマイクを手を取った。

「何だよ！ サラマンダー！ こつちやあ忙しいのツ…！」

『お前もしかして忘れてるんじゃないだろうな？！ ちゃんと手に入れたのか？！』

「は？ 何の話？」

『何だとおっ！？ まさかハナから女のためだけに俺を利用したのかツ！？』

「じょ…うだんだって！ ちゃんと盗んだよ。“マリアとドラクウ”の原版！」

(えっ？ 原版?!)

エアリスはぴくりと聞き耳を立てた。

「あくまでも女は“ついで”だつて。もちつと俺を信用してよサラちゃん」

『うるせえ！ お前の身勝手に何度振り回されたかわかってんのか！?』

「あゝ、はいはい！ 今持ってくよ。ちゃあんとお宝は俺のポケットに…」

ジタンは自分のズボンに括られた大きな袋に手を入れる。しばらくガサゴソしていたが、彼の表情が見る見る曇っていくのを見て、エアリスは必死で笑いを堪えた。「!?’ 慌てて袋を全開にし、中を覗き込む。だがお目当てのものは見つからなかったようだ。

それはそうだろう。

何しろ、彼のポケットから落ちた何やら古ぼけた本は、今エアリスの眼の前…ソファの上にあるのだから。慌てふためくジタンを後目に、エアリスはそつと原版を引き寄せた。見るからに貴重そうな重厚感を持った書物である。表紙には霞んだ文字で何やら書かれていたが、異国の言葉らしく、エアリスには解読することが出来なかった。

『オイ、ジタン?』

「あつ…いや…その…なんだ」

『…ちよつと待ってる。オートパイロットにしてそつち行く』

嫌な予感を催したのか、通話口の向こう側からサラマンダーの曇った声が響いて、それきりあちらからの言葉は聞こえなくなっ

まった。

「ヤバい！ 何で！？ 何でないの?!」

しばらく身体のおちこちを探していたが、ジタンはようやくひとつの可能性に気付いて、放置しておいたエアリスに眼をやった。

「…な、なんでせう?」

「お前…ッ!」

背中に原版を押し込めながら、エアリスは先ほどまでとはまた違った気迫を向けてくるジタンを刺激しないように努める。エアリスは慌てて立ち上がると、不自由な両手で原版を隠しながら後退った。脚を拘束されていないのは、不幸中の幸いである。だがこうなると、一概に幸福とは言えないのかも知れないが。

「出せッ!」

「こ、これが目的だったのねッ?!」

負けじと、エアリスが大声を出した。ジタンは唇を噛んで悔しそうな表情を見せる。

「…ああ。数百年前の世界の演劇界をリードする存在だった天才劇作家ギルバート。

彼の遺作となった“マリアとドラクウ”の原版が、そいつってわけさ。俺たちの狙いは、それだ」

「じ、じゃあ…何でガーネットさんをさらおうなんてカムフラージュしたの?」

「いやあ、ガーネットが俺の好みにクリティカルヒットしちゃってさあ—」

どうしても俺のヨメさんにしたくて、どっちも盗もうと思っただけよ」

「サイテ〜!」

「何とでも言えッ! さあ! その後ろに隠してる原版を…」

『聞いちゃった、聞いちゃった!! お宝目当てのセコい偽装工作〜!』

聞き覚えのある声が、どこからか響いた。勿論、エアリスにとっては…だが。

「な…!?!」

『いつも威張っているけれど、結局あなたは色キチガイ!』

偽装しなけりゃ盗めない、やることなすことす・べ・てセコい!

『!』

「くっ…クラウド?!」

エアリスは思わずその名を叫んだ。

「何ッ!? こいつが…クラウド?!」

ジタンは声の出所を探そうと辺りを見回す。何となく、音源が近いような気がする。

『ちょっと! あんた完璧キャラ変わってるよ!』

違う声色が聞こえた。女性の声だ。

『うるへ〜！ こうなりやキャラだの人気だの構ってられっか〜！』
『ユフィ、そいつを少し抑えている。私が説明する』

低い声が聞こえ、ジタンは遂に音源を見つけた。

「ま、まさか?!」
「きゃっ!?!」

強引にエアリスを振り向かせ、その手に握られた原版を手に取る。
どこからどうみても、本物だ。

『怪盗ジタン四世、聞こえているか』

「…ああ!」
『もう判っていると思うが、その原版はこちらが用意した偽物に過ぎない。』

本物は、今ユフィのバックパックの中で安らかな寝息を立てているぞ』

思ってもみない展開に、ジタンの頬を汗が伝う。

『色々とお前に関する情報を調べていてな。お前はなかなか冷静で、段取りも上手い。』

だから、ディオからその原版が彼のコレクションのひとつだという話を聞いたとき、

もしかしたらガーネットをさらうのは本作戦のカムフラージュではないかと考えたのさ。

もっとも、さっきの話からすれば私の予想とは“ついで”の対象が反対だったようだが』

「くっ…お前ら…俺をコケにしゃがってッ！」

ジタンは偽物の原版を握り締めた。みしみしと曇った音が聞こえる。

『お前の特徴と性格は、専門家に聞いていたから予想するのが楽だったよ』

すると更に、本の中からダミ声が聞こえてきた。

『があゝっはっは！！ 上手く出し抜いたつもりだろうがそうはいかんぞジタン！』

「げっ！ とっつぁん？！」

『ガーネットさんが偽物だということは全く知らされていなかったが、

その原版が盗まれるかも知れないということは最初から頭の中にあっただけ！

その偽物に盗聴機械を備え付けたのは、我々警察だったのでえあゝゝゝ！！』

ガサガサと雑音が響き、ヴィンセントが再び言った。

『…警部を連れてくる予定はなかったんだが、勝手についてきた。悪く思うなよ。』

さて、ジタン。お前には仲間が“ふたり”いるらしいが、そのふたりはお前と違って、

女にそれほど興味がないらしいな。仮にお前が本物を余り欲しがらなくても、それは頷ける。

何しろお前はそこに立派な戦利品を持っているんだ。このまま撤退してもいい。

しかし、そのふたりはどう思うだろう？ 盗んだのがその女だけだったと知ったら、

そのふたりはお前をどうするんだらうな？』

「…」

殺されるだらうな…と、ジタンは暗に思った。

「す、すっごお〜い！ ヴィンセント…カッコいい！」

エアリスはすっかり感心してしまった。あの強気なジタンが、手玉に取られている。

『彼女に…エアリスに手荒な真似はするんじゃないぞ。その方がそっちの身のためでもある。』

お前も、何としても本物を手に入れたと思うているはずだ。だがもし、エアリスに何かあったら…？！ うわ！ やめろ！？ クラウ…』

ガガガガ…。

『やいコソドロ、良く聞け！！』

声の主が、入れ替わった。

『本物の原版は俺たちが預かってる！ エアリスに指一本触れてみる？！ だあ〜いじな原版はこおだっ！！』

パン！

ジタンの手の中で原版が破裂し、中からミニチュアの国旗やら色紙やらが部屋に舞った。

ぶるぶると悔しさに身を震わせ、ジタンはこみ上げる破壊衝動を必死で堪えていた。

「…ど、どおよっ！ 凄いでしょ、私の仲間っ！！」

エアリスが胸を張る。こうなつては、ジタンも自分に危害を加えることは出来まいと踏んだのだ。

散乱した国旗を頭に載せたまま、ジタンは細い眼でエアリスを睨んだ。

「な、何よっ！ やるつての！？」

「…まさか“ふたつ”も偽物を掴まされてたとは、な」

ゆっくりと頭を払い、溜息混じりにジタンが呟く。

「こんな屈辱は生まれて初めてだ。この代償は、高くつくぜ？」

「っ、強がりはやめたら？！ もうあんた、どうしようもないじゃない！」

「なあに。修羅場は慣れっただぜ…っつと、あいつら、来たな」

ジタンがドアを見遣る。すると、荒々しくドアを開けて燃えるような赤い髪の男と、片眼に眼帯を巻いた背の高い、美しい女性が踏み込んできた。

「ジタン！ 聞いたぞ！ 原版を忘れてきたというのは本当かッ！

？」

女性がジタンの胸ぐらを掴み、ブンブンと揺さぶる。その横で赤い髪の男：サラマンダーは拳銃を構え、銃口を静かにジタンに向けていた。シリンダー式の銃の撃鉄は、既に起きている。

「お、落ち着けよベアトリクス！ それにサラマンダーも、銃を下ろしなつて！」

「馬鹿言うんじゃないやねえ！ 俺たちは原版のためにこうしてお前に協力してやつたんだ！」

お前はその女をさらつちまえば満足かも知れねーが、それじゃこちの利益にやらねえ！」

「その通り！ お前、まさか我々を謀つたのではあるまいな？！」

ベアトリクスと呼ばれた隻眼の女性が、切れ味鋭そうな剣を持ち出す。鼻先に刃を突きつけられたジタンは、たらたらと冷や汗を流しながら必死で弁明を試みた。

「待てツ！ 原版なら、ちゃんと手に入るツ！」

「ならば言ってもらおう！ その方法を！」

「あんな、実は原版は……」

その瞬間、どこかで爆音が響いた。地震のような震動が、飛空艇を揺るがす。壁に掛けてあった絵は外れ、宝石棚がぐらぐらとダンスを踊っている。何事かと、その場の空気は張りつめた。

「来やがったか！」

ジタンが叫ぶ。してやったりという表情だ。

「どついつことだッ!？」

「原版を持った連中が、今飛空艇に乗ってるんだ」

「何だと!？」

「だから、そいつらを倒して原版を手に入れりゃ、万事おっけいじゃない？」

「この娘は人質というわけか？」

ベアトリクスがぼかんとしているエアリスをちらりと見た。ジタンは頷き、サラマンダーも仕方なしということ合意したようである。だがそれでも、エアリスには仲間たちが負けるはずがないという期待が膨らんでいた。

「まったく！ 最初から原版だけを狙っていれば、こんな苦勞をせずつとも良かったものを」

ベアトリクスが溜息をつく。サラマンダーも全くその通りといった表情。

「さあ〜て！ そんじゃ早いとこやっちまおうぜ！ 船が落とされたら洒落になんねえ！」

ジタンが言う。まんまと仲間たちの怒りの方向を逸らせてしまった。成る程、確かに“修羅場”をいくつも潜り抜けてきたんだろうなあ、エアリスは思う。

だが彼らは知らなかった。船を落とそうとしているのは、クラウドたちではないことを。

x x x

「ほひゃひゃひゃ！ ぼくちんを馬鹿にする奴はみんなコロス！
コロス〜〜〜！！」

身体中に傷を負い、凄まじい形相をしたドン「コルネオは、自らのペットに次なる指令を与える。先ほどの一撃は飛空艇の末端を掠め、その尋常ならざる威力を証明していた。

「行け〜！ エフレイエ〜！！ 奴らみんなぶつ殺せええ！！」

金色の、翼のあるドラゴンに跨ったコルネオは、いつもとは違って何となく格好が付いている。ペットと呼ぶには余りにも過ぎた生物の登場に、飛空艇の屋根に飛び移ったクラウドたち一行は上手く状況を飲み込むことが出来ない。ジタンとの通信を終えた後、シドが後方から凄まじいスピードで追ってくる何かを見付けた。もしそれがなかったら、コルネオのペットであるエフレイエの放つエネルギー弾の餌食になっていたところだ。激烈な威力の弾は、何とか全弾方向を逸らすことに成功した。

「おのれ、最後の最後で使えるペットを出してきたな！」

グインセントが銃を構え直し、歯を食いしばった。高速で飛び回っているせい、上手くエフレイエまで銃弾が届かない。無論その調子だから、クラウドやティファなどの近接攻撃など届くはずもなかった。

「この船が落とされるのは構わないけど、中のエアリスまで危険な

眼に遭わせるわけにはいかない！」

「クラウド！ あなたの破睨撃なら……」

ティファが言う。クラウドは渋った。

「いや、正直あんなに距離があると……。せめてもう少し近付いてくれれば……」

「俺の弾も風に流されちまって上手く飛ばねえ！ コルネオの奴、厄介なモンに乗ってやがる！」

バレットのギミックアームからは白い煙。高速で航行するヒルダガルデの上で、クラウドたちとドン＝コルネオの戦いは最終局面を迎えようとしていた。

「クラウド、奴の様子がおかしい」

ヴィンセントが言う。不吉な言葉に、クラウドはぎくりとする。

「どっいつことだ?!」

「さっきから攻撃を余り仕掛けてこない。まるで何か……」

すると突如として、エフレイエが超スピードでこちらへ向かってきた。空気を振動させて嘶くドラゴンが飛空艇目掛け特攻を仕掛けてきたのである。

「クソツ！ そう簡単にやられてたまるかよツ!!」

バレットが銃を乱射するが、余りの速さに弾が追いつかない。夜の闇を蹴散らし、黄金の光となったエフレイエが飛空艇に突っ込もうとした瞬間、誰もが一瞬眼を閉じた。だが、一瞬後に衝撃は伝わ

ってこない。

それが、命取りとなった。

「クラウド、うしろっ!!」

ティファの声に、驚いて後方を振り向くと、既にその竜は大口を開けて極大エネルギーを発射する直前だった。

「し、しまった!!」

虚を突いた攻撃に対処出来たのは、クラウドとティファ…だけであった。

「ぎゃ~~~~~!!」

悲鳴が聞こえた。これはバレットのものだ。しかしその声は、本来行つてはいけなはずの場所、つまりは飛空艇の足場から外れたところで聞こえていたのだった。

「ごめ~~~~ん! 後はクラウドたちに任せた~~~~!!」

そう言つて早々と忍具であるパラシュートを広げたのはユフィ。

その横では、デブモーグリが巨大な風船状になってバレットとシドを抱えている。ヴィンセントとレッド??は…普通に落下していた。

「わああっ!! みんな~~~~!!」

ティファの声も虚しく、仲間たちは全員夜の砂漠へと飲み込まれていった。コレルの砂漠が下方には拡がっている。落下の衝撃は激減するだろうが、いかなせんこの高度だ。無事である保証はどこに

もない。

恐らくはエネルギー派の直撃を免れるため、それが発射される前に地を蹴っていたのだらう。彼らに外傷は皆無だった。

「ティファ、大丈夫だ。バレットやシドたちはあの通りだし、ヴィンセントもレットも、

下が砂地だから何とか上手く着地するさ。それより、怪我はないか？」

「う、うん…大丈夫。私最初に気付いたから」

ティファの声がなかったら、クラウドも今頃は砂漠へダイブしていただらう。もうこちらの戦力は自分とティファのふたりだけになってしまった。エフレイエの予想外の強さに、脱帽せずにはいられない。

「も、ものしゅごいパワー…シンジラレナイ！」

「ふざけやがって…！ またあんな遠くまで逃げてる！」

ヒット&アウェイ戦法と呼ぶのが一番しつくり来る。エフレイエは既に、ヒルダガルデから遠く離れた空を駆けていた。手の出しようがない。万事休す。

「うおお〜い！ 助けてくれ〜い！！」

更に追い打ちを掛けるように、あのダミ声が飛空艇の側面から聞こえた。嫌な予感は的中。駆けつけた二人が眼にしたのは、辛うじて突起にすりついて落下を免れているスタイナー警部の姿だった。そういえば、先ほどから全く存在が消えていた。エフレイエの攻撃でたまらず吹き飛ばされたのだらう。

すぐさまクラウドが手を伸ばす。

「警部！ 掴まってくれッ！！ すぐ次が…」

言いかけたとき、既にエフレイエの姿は消えていた。高速で移動する巨竜は、また先ほどと同じようにクルドたちの後方へ回り込んでいたのである。

「クラウドっ！」

「くそおッ！ かわしきれない…」

二人が思わず眼を瞑る。エフレイエは嘶き、またあの超出力のエネルギーを発射すべく口を開いた。

「雷鳴剣！」

天空から一条の雷が舞い降り、飛空艇の速さをあつと言う間に追いついたかと思うと、ひとりの女性が掲げた剣に宿る。軽く地を蹴った女性が、裂帛の気合いと共に剣を大上段から振り下ろした。

轟音が響き渡り、一瞬後には後方へ置き去りにされていく。エフレイエは苦痛と怒りにのたうち回った。上に乗るコルネオも、必死で首にしがみついているだけで精一杯である。

「何だありゃあ！？ あいつもお前らの仲間かあ？！」

「…！」

クラウドが辛うじて眼を向ける。そこにはつい数時間前、自分の目の前でエアリスを連れ去っていった憎き怪盗ジタン四世が髪をなびかせながらエフレイエを見つめていた。横には赤い髪の厳つい男が銃を構えている。エフレイエに一刀を喰らわせた女性が、すぐさま彼らの元へ駆けつける。

「ジタン…四世！」

「約束通り、この女は無傷で連れてきてやったのに…。こりゃあんまりじゃねーの？」

ジタンが腕を掴まえているのは、ティファと同じ舞台衣装に身を包んだエアリスだった。それまで不安げだった彼女の顔は、クラウドの姿を見た瞬間にぱあっと明るくなる。

「クラウド！」

「エアリス！ 無事か！！！」

「お〜っと、そーはいかねえ！ 原版が先だあ。さっさと出しな」

エアリスとクラウドの間に立ち塞がるように、ジタンがずいっと前に進み出る。

『実はない』などとは口が裂けても言えるはずがない。何しろ、原版を持ったユフィはもう地上目掛けて落下してしまったのだからクラウドは何とかなしなければと思案を巡らせるが、片手にスタイナ一の巨体を支え、エフレイエの反撃にも怯えながらの思考などまともなものであるはずがない。

「原版は…あの人に取られちゃったの！」

ティファがジタンに言った。指差した先には、怒りに身をうち振るわせているであろうエフレイエの姿。

（なあ〜いすフォロー、ティファ！）

「ナニ〜!?」

「あのでっけえ竜は、あんたらの仲間じゃないってのか?!」

赤い髪の男…サラマンダーが驚いてティファに尋ねる。彼女はこくりと頷いた。

「何てこと…。眼も当てられないわ」

隻眼の美しい女性、ベアトリクスが溜息をついた。

「オイ！ てめえ！ クラウドとか言ったな！！ お前の浅知恵のお陰でとんだ迷惑だ！

どう責任取ってくれるんだよ！？」

まるで自分たちが悪いかのようにクラウドを罵倒するジタン。クラウドも、黙ってはいられない。

「何だと！？ コソドロが偉そうにッ！」

「コソドロオ？ 俺様をそこらのチンピラなんぞと一緒に…」

「危ないッ！」

クラウドをティファが、ジタンをエアリスが突き飛ばした。その数センチ上空を、エフレイエが物凄い速度で通過していく。危うく空の上で交通事故に遭うところだった一行は、ホッと胸を撫で下ろす。

その勢いでスタイナーの手が離れてしまったことに、誰も気付かなかった。

瞬間、クラウドとティファの頭の中から“スタイナー”という人物の存在が消えた。

「…助かったぜ、“ガーネットもどき”さん！」

「エアリス！ もうっ！ 今はそんな問答してる場合じゃないでし

よッ!？」

「ああ。確かにな！ エアリスの言う通りだったぜ！」

既に名を呼び捨てにしているジタンを見て、むかつと来るのは色男の性。起き上がって文句を言おうとしたクラウドを、ティファが止める。

「今はヘンなヤキモチ焼いてる暇ないよ！」

「お、俺は別にヤキモチなんて…!!！」

妙に動揺するクラウドを見て、ティファは少し胸が痛んだ。こんなときでも“女”である自分を認識してしまったのだ。諭す言葉に私情が挟まれていることに、彼女は気付いていた。

「…良く見たら、あのとき舞台上で最初に俺が行動不能にしちゃった奴じゃんか」

ジタンがクラウドを見て、クスリと笑った。

「…何だよ」

「ふん、まあいいや。エアリスの言葉が正しけりゃ、そこそ腕は立つんだろ？」

「何ならお前で試してやってもいいぜ？」

クラウドが剣を抜く。

「その意気だ」

ジタンは更に笑った。

「サラマンダー、奴の動き、止められるか？」

「図体が図体だけにな…。弾が当たったとしても大きなダメージは期待出来ねえ」

「間合いに誘い込んでくれれば、私が斬る」

ベアトリクスが剣を構えた。ジタンはサラマンダーと協力して、どうにかしてベアトリクスの間合いまでエフレイエを誘い込む方法を考える。

「奴の狙いは俺だ。誘導は、俺に任せてくれ」

「何だ、怨みでも買ってるワケ？」

「因縁さ」

汗を拭うクラウドを心配そうに見つめるエアリス。その視線に、クラウドも気付く。

「心配するなよ。約束したろ？ 守ってやるって」

「…クラウド…」

「お熱いところ、すいませんけどねえ」

ずい、とティファが前に進み出る。

「な、何だよ…さっきヤキモチ焼いてる暇ないって言ってたじゃないか」

「やっ、ヤキモチじゃないもん！ 私はどうしたらいいのかと思ってっ！」

「…ティファは、エアリスを頼む。今自由に動けるのはティファとエアリスだけだ。」

だからふたりで、自分の身は自分で守ってくれないか」
「…わかったわ」

渋々エアリスの傍に行くティファ。二人並ぶと、本当に似ている。生まれついでこの形質などは仕方ないが、容姿に関してはやはり遠目では判別することは出来なかったであろう。前髪が少しハネているのがエアリスだということが、辛うじて判る。

クラウドは何としてもこの場は納めなければならぬと、刀を構える。

「コルネオツ！ これで最後にしてやる！！ かかってこい！」

「ほひひひ！！ 望むところオ！ ぼくちんを馬鹿にする奴は死ぬ！！」

お前はカスだ！ カス以下のカスなんだ~~~~~！！」

コルネオがエフレイエに鞭打つと、巨獣は咆吼と共にヒルダガルデ目掛けて突進してきた。既に殺気だけでクラウドを尻込みさせてしまいそうなほど、エフレイエはいきり立っている。無論、ここで引く訳にはいかない。クラウドはジタンたちに目配せすると、その刀に闘気を集中させ始めた。

狙うはコルネオ。エフレイエのような巨体に、一撃必殺は望めない。

「エアリスとティファ、もう少し離れて！」

クラウドの言葉に従い、ふたりは戦闘メンバーとかなりの距離を取った。その位置から見ても、向かってくるエフレイエの超スピードがはっきり見て取れる。

風を唸らせ、凄まじい勢いで迫る敵。クラウドは一瞬を見極め、叫ぶ。

「今だっ！」

銃声。

サラマンダーが放った一発の銃弾が、正確にエフレイエの眉間を捉えた。スピードこそ落ちないものの、明らかに闘気が薄らいだようである。「喰らえッ!!」刀を振りかざし、クラウドは必殺の破暈撃を放つ。それに呼応するように、ジタン四世も身体中の生命力を闘気に変換し、エフレイエ目掛けて解放した。

「ぐらんどおおお…り〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜さる!!」

巨大な爆発がエフレイエを包み、一瞬後にその中から傷だらけの竜が姿を現した。もはや殺気は消え失せ、勢いも最初の面影がない。そして、すつと前に進み出る女性剣士。

月明かりに照らし出され、彼女はゆっくりと腰の剣の柄に手を掛けた。

「ほ、ほひゃあああ!?! ちょ、ちよつとまっ…」

コルネオの嘆願虚しく、刹那の拍子でベアトリクスが剣が動いた。

「…また、つまらないものを斬ってしまったわ」

断末魔の悲鳴と共に、エフレイエは大きく飛空艇に向けられた進路を外れ、上空高く舞い上がった。それはまるで、打ち上げ花火が最後の輝きを放つが如く…月影にそのシルエットが被さった。

落ちていく巨竜。ベアトリクスはそれを見つめながら、エフレイエの血が付着した剣を振った。鞘に納めるときの音が、夜の闇に吸い込まれた。

「…終わっただか」

クラウドはほっと胸を撫で下ろす。コルネオも、もう追っては来ないだろう。

だが、ジタンは何かに気付いてつかつかと飛空艇の縁へと近付いた。

「…こいつは驚いた。あの攻撃の中で良くこんなところに掴まれたな」「何イ!?!」

急いで駆け寄る。そして、ジタンと同じ場所を他の三人が覗き込むと…。

「た、助けちくり! もう悪いことしまちえんから…!!」

呆れた生命力だった。コルネオは自慢のモヒカンヘアをすっかり萎えさせ、必死の形相で突起にへばりついていたのである。勿論、『助ける』と言われて素直に助ける理由など、どこにもない。

「馬鹿言つなツ! 今度こそ年貢の納め時だコルネオツ!!」
「しょ、しょんな〜〜!!」

コルネオの手が、自らの脂でずると滑っていく。恐怖に焦れば焦るほど、その発汗量のせいで死を早める結果になる。次の瞬間、遂にコルネオの手がヒルダガルデから離れた。

!?

「ジタン?!」

「あ、ああ~~~~!! ありがとう!! あんたは命の恩人ですう!!」

落ちる直前、ジタンが身を乗り出してコルネオの腕を掴んでいたのだ。思っても見ない行動にすっかり度肝を抜かれたクラウドは、納得出来ず彼に抗議する。

「何考えてる! この男は、助ける資格なんてないゲス野郎だぞ!」

「ほひゃひゃ!! やっぱりオカマとは器が違うのう! 大怪盗ジタン四世様は!」

すっかり勝ち誇ったように、コルネオはクラウドに言った。

だが、コルネオとクラウドは知らない。ジタンの仲間ふたりが、冷やかな眼でその一部始終を見ていたことに。彼らには、“見えていた”のである。事の、顛末が。

「…さて、すぐ終わるから聞いてくれ、コルネオさんよ」
「ほひ?」

不意にジタンがコルネオに声を掛けた。突然のことで、何のことだか判らない。

「俺がこうしてお前みたいな奴をわざわざ助けるのはどういつときだと思っ?」

- 1 死をかくごしたとき
- 2 勝利を確信しているとき
- 3 なにがなんだかわからないとき

「まったく、とんだ骨折り損だったではないか」
「わりイ、ベアトリクス！」

クラウドは一応でも死線を共にくぐり抜けた三人の様子を窺っていた。どうやら、自分は少しこの三人について誤解していたようだ。そういう思いが、自然と湧き上がる。

ひとつの小さな物にこだわらないからこそ、彼らは今まで成功してきたのかも知れない。世界に名だたる大怪盗は、仲間の命を第一に思いやる立派なリーダーという一面も持っていたのだった。

「…済まない。助かった」

クラウドは素直に言った。

「あ？ 勘違いすんなよ。命は一個、お宝はいくらでもある。死んだらそれまでだからな」

「まあ、我々のような者と組んで戦ったこと自体、不本意なことだろうな」

ベアトリクスが言う。

「いや」

クラウドが彼女の眼を見て答える。

「そんなことはない」

「え…？」

「俺だけじゃ、絶対にコルネオは倒せなかった。倒せたのはあなたたちのお陰だ。」

エアリスとティファを守ることが出来たのも、あなたたちがいた

からこそだ。本当にありがとう」
「…わ、私は別に…」

ベアトリクスが慌てて眼を背ける。その様子を見ていたエアリス、ティファ両女史は眼を細める。

「まゝた色眼使って…ヤな感じい！」

「ホントよねえ、エアリス」

「をいつ！ 聞こえてるぞそこ！」

クラウドがふたりのもとへ歩み寄る。

すると突然、凄まじい震動がその場にいた全員を襲った。

「な…っ!？」

「今度はどうした！ 何が起こったッ!？」

ジタンが叫ぶ。

「やべえ！ あの竜が付けた傷がデカすぎたんだ！ 堕ちるぞ!!！」

サラマンダーの顔が青ざめる。髪の毛の色と相まって、一層強調されて見えた。激震は止まず、もはや立っていることすら困難になっってしまった。

「救命艇がある！ そいつに乗って脱出しよう!!！」

ジタンの言葉に、全員頷く。一刻も早く脱出しなければ、墜落に巻き込まれコルネオと同じ運命を辿ることになってしまう。揺れが小さくなった隙を見計らい、一行は何とか立ち上がって体勢を整え、ジタンを先頭に救命艇のある船底へと向かおうと走り出した。

と、次の瞬間。

「うわ!?!」

ジタンの脚に何かが絡みつく。良く見れば、それは見慣れた鉄の輪。即ち、手錠だ。

「ぐわゝゝははは!! このスタイナー、貴様を逮捕するまではおいそれと死なんわゝ!」

「げえっ! とつつあん?!」

ぬっと船縁から這い出してきたのは、エフレイエとの戦闘でクラウドが手を離し、地上へ落下したと思われたアデルバート「スタイナー警部その人であった。

すっかり記憶のゴミ箱に捨てておかれた彼の存在を、ようやく思い出すクラウドとティファ。

「と、とつつあゝん…今それどこじゃないってえ!」

「やかましー! 貴様のお陰で酷い目に遭ったわ!」

悶着を起こすふたりを無視し、サラマンダーとベアトリクスが歩を進めた。

「じゃあな。頑張れよジタン」

「あっ! てめーら!! 仲間じゃなかったのか俺たち!」

「確かにそうだが、私はお前と心中したくはない」

冷ややかに言い放つと、ふたりはそのまま階段を下りた。残されたクラウド、ティファ、エアリス。どうしたものかと顔を見合わせ…結局見捨てるという策を取った。

「済まん！」

「ごめんなさいね」

「頑張つて、自称“恋の狩人”さん」

エアリスが最後にジタンに別れを告げると、もはや残るはジタンとスタイナーの二名だけとなってしまった。ムカムカと怒りがこみ上げてくるが、こみ上げればこみ上げるほど今の自分が情けなくなる。

「があゝつはつは！ 遂に仲間にも見捨てられたな、ジタン！」

「…とつつあん、言っとくけど、ここで俺を逮捕しても無駄だよ」

「なぬ？」

「だってこの船もつすぐ…」

直後、二人の背後の床が生き物のようにつねったかと思うと、凄まじい大音響と共に爆発した。エンジンに引火したのだろうか。火の手と煙で、視界が遮られる。衝撃波がふたりを襲い、一瞬で彼らは近くの壁に叩きつけられた。

「ななな！？」

「い…ててて…！ だから言ったろ！？ ここでふたりとも死んだら、意味なくない？」

「ムウ、確かに…」

スタイナーが腕組みをして考える。身体は、壁にめり込んでしまっていた。

「ここはさ、一時休戦っつーことで…」

「…良かろう。だが、盗人の手は借りん。俺は俺で、脱出させても

らう！」

「オツケーオツケー！ そんなじゃま、この手錠外して？」

ジタンは自分の脚にしつかりとはめ込まれた手錠を指差して言う。
スタイナーは渋々懐に手をつ込み、ごそごそと鍵を探した。

「?!」

「…とつつあん？」

「ない」

「ハ？」

「オトシタ…」

「!?!?!?」

どがぐん！

「どわ~~~~!!?!?」

すぐ近くで爆発。事態は悪い方へ悪い方へ加速する。ジタンはスタイナーを見る。スタイナーも、ジタンを見る。どうやら意見は一致したようだ。手錠で結びつけられたお互いの片足をぴったりとくっつけ、そして肩を組む。

「とつつあん！」

「うむ！」

ふたりは信じられないぐらいのスピードで、船底への階段を駆け下りていった。爆発が後を追う。炎が迫る。だが、彼らのスピードには及ばない。

恐らくは世界中で誰が挑戦したとしても、このときの二人の速度には、ついてこれなかっただろう。

x x x

救命艇は、中型のプロペラ機だった。形状はタイニーブロンコに良く似ているが、収容可能人数はこちらの方がずっと多く造られているようだ。既に煙の立ち込めた船底に到着したクラウドたちは、急いで脱出の準備に取りかかる。

操縦席にサラマンダーが乗り込み、計器をチェックする。何年も使っていないのか、埃があちこちに溜まっていた。「はあっ！」その横ではベアトリクスが脱出口を開くため、錆び付いて動かなかった扉を一刀両断した。出口が解放された瞬間、突風が船艇内に吹き荒れる。

「よっしゃ！ 何とか行ける！ 乗れッ！」

サラマンダーの指示に従い、エアリスとティファが乗船する。ベアトリクスも、一足飛びで右翼に飛び乗った。残るはクラウドだけだ。しかし彼はなかなか乗ろうとしない。痺れを切らしたサラマンダーが言う。

「おい！ 何してる！ 早くしねーと爆発するぞ！」

「判ってる！ 判ってる…けど」

ジタンを置いていく訳にはいかなかった。仮にも一緒に戦った戦友だ。見捨てることなど出来ない。

その気持ちを察したのか、サラマンダーが聞く。

「…どーするよ。俺ア任せるぜ」

「…1、脱出する」

2、そのまま

…（置いていくわけには、いかない）

クラウドは来た通路を振り向く。既に炎が拡がり、いつ焼け落ちてもおかしくない。まずは脱出しなければならないことは判っていたが、どうしても身体が動いてくれなかった。これも、エアリスと出会って現れた変化だろうか。

ティファとエアリスはその様子を固唾を呑んで見守った。どちらも、クラウドを信じている。ベアトリクスは右翼に座し、じっと眼を瞑っている。辺りには異様な匂いが立ち込め、温度も急激に上昇していった。クラウドは、選択を迫られている。

「…1、脱出する」

2、ジタンが気になる

…（見捨てるわけには、いかない！）

次の瞬間、炎の壁をぶち破ってふたつの影が船底にまろび込んできた。「あちあちあち！！」喚きながら転がり回るのは、スタイナ！。お尻に火がついていた。

「ほらっ！ とつつぁん！ 急げッ！！」

「うう… 労災は下りるのだろうか…」

「よし！ 急げふたりとも！！」

クラウドがスタイナの肩を抱き、船に押し込めようとするが、ジタンと脚で繋がっており、なかなか思うようにいかない。

「どいてー！」

すると船からティファが飛び降りる。そして無造作にジタンとスタイナーについた手錠の鎖を掴むと、一気に力を込めた。「ふんが！」鈍い音と共に引きちぎれる手錠を見たジタンとスタイナーが眼を丸くする。クラウドに至っては、もはやそんなことは常識になつてしまっていたので反応すら見せない。

自由になったふたりを無理矢理船内に入れてしまうと、クラウドは発進のGOサインをサラマンダーに送った。一気にスロットルを全開にすると、救命艇のエンジンが咆吼した。

がくんと一瞬無重力が全員を襲い、一瞬後に強い浮揚力で救命艇は空を駆け出した。プロペラに巻かれた煙が、螺旋状となって船の後方へ流れていく。

「良く無事だったな！」

船内で、クラウドがジタンに言う。あちこち煤と火傷だらけだったが、ジタンは笑い、妙な口調で答えた。

「ほうしゅうをもらわないうちは死んでも死にきれないからな！」

「誰の真似だよそれ」

「……ってそんなことはどうでもいい！ よくも俺を置いてけぼりにしたなア！」

「うわっ！ やめろって！！」

炎上する飛空艇ヒルダガルデは、ゆっくりと軌道を海原へ向けた。そのまま進めば、まず人間に被害は及ばないだろう。不幸中の幸いだった。救命艇の中で、一行は巨大な流れ星を見ている気分になる。あの中にはジタン一味が集めた沢山あったはずだ。

エアリスはふと思い出し、正面に座るジタンを見遣る。彼は少し淋しそうな眼で窓の外を眺めていた。やはり心が痛むのだろうか。盗品であるのに変わりはないが、苦勞して集めたものが一瞬にして灰になっていくのだから。

「……」

「心配すんな」

エアリスの視線に気付いたのか、ジタンが言った。

「お宝はまた集めりゃいいからな」

「……ごめんなさい」

「何で謝んだよ。ま、そりゃちったあ淋しいけどな。ヒルダガルデがなくなるのは」

「私たちがコルネオを連れてきたりしたから……」

ティファも申し訳なさそうに言う。ふたりの美女に暗い顔をさせ
ては、“恋の狩人”の名が廢る。

「これも何かの巡り合わせってこった！ いちいち気にしてたら、
こんな商売やってらんねえって」

「商売！？ 貴様、この俺の前で良くも又ケ又ケとツ！」

「だ〜！ とつつあんがいるの忘れてた！」

ふと、クラウドが海の彼方を見つめる。ヒルダガルデの向かう先
… 水平線の向こうが、薄い光の膜に覆われてきた。

「…日の出だ」

「あ、ほんと」

運転するサラマンダー以外が、海原の彼方に広がる水平線を見た。一瞬緑色の光がすっと走ったかと思うと、境界の向こう側から眩いばかりの光が溢れ出す。クラウド、エアリス、ティファ、ジタン、スタイナー、羽翼に座るベアトリクス、操縦桿を握るサラマンダー。それぞれの輪郭を彩り、太古の昔から人々に微笑み続けてきた母なる太陽に、赤々と燃えるヒルダガルデが還ってゆく…。

それはさながら、物事の終焉というものを端的に再現しているように見えた。

「…綺麗」

「はあ…こいつあすげエヤ。俺の集めた宝石なんて屁みたいなもんだ」

「ジタン、原版のことだが…」

クラウドが切り出す。ジタンはクラウドの方を見ずに、首を横に振った。

「もうどうでもいいさ。代わりって言っちゃあ何だけど、こんな贅沢な日の出を見られたし」

「確かにな！ 飛空艇一個分の価値があるぜ！」

操縦しているサラマンダーが高らかに笑った。

「俺のポケットにや大きすぎらァ」

ジタンがぼりぼりと頭を掻く。

ヒルダガルデが海に飲み込まれる瞬間、彼らは微かな渚の匂いを感じた。

x x x

「くおるあ〜〜！ この縄をほどけジタアアアーン！！」

遠くでスタイナーの喚きが聞こえる。

救命艇はウータイエリアに少し入った草原に着陸した。面倒にならないよう、ジタンたちはスタイナーを簀巻きにして野原へ放り出したのだ。無論クラウドたちは見ないフリ。潮風が心地よい。

「これからどうするんだ？」

クラウドが訊いた。

「さてね〜。多分もうすぐ警官隊が嗅ぎつけて来るだろうし、さっさとスラかるさ」

「結局本物のガーネットさんには会えず終いね」

エアリスが笑う。その横で、ティファも微笑んでいた。

「まったくだぜ。このジタン四世、一生の汚点だ。手ぶらで逃げるなんてよお」

救命艇の整備を行っている間の歓談。クラウド、エアリス、ティファとジタンは岬の端に立っていた。カモメが飛んでいる。のどかな風景だ。

「手ぶら…。あ、そうだ。これあげるわ」

そう言ってエアリスがジタンに手渡したのは、舞台衣装であるサークレットだった。ヒルダガルデの展示ケースの中にあつた貴金属類に比べれば何のことはない価値のものである。

「それ、ガーネットさんモデルなんだって。試作品もらったんだ」
「お、おい…。いいのか？」

クラウドがおろおろして尋ねるが、エアリスは対して気にしていない様子である。ジタンはそれを受け取ると、まじまじと見つめた。確かにそこそこ高価そうではあるが、それ以上の価値は見込めない。しかし、ジタンには違った意味でそのサークレットが輝いて見えていた。

「…安モンだな？」
「何よお！ いらないんだったら返してッ！」
「おっつと！」

エアリスの伸ばした手をひらりとよけ、ジタンは笑った。

「クラウドって言ったかい？」
「ん？」

ジタンはおどけた表情でクラウドに声を掛けた。

「その女、大切にしてやんなよ」
「んなつ?!」

途端に真っ赤になるクラウド。

「何たってそいつ、ず〜っと“クラウド〜、クラウド〜”ばっか
りだったからな!」

「ちょッ!! あんたっ!!」
「ははは!」

完熟トマトとなったエアリスは、ふと背後を振り向く。すると案
の定、にこやかな笑顔でティファ「ロックハートが抱き付いてきて、
エアリスの首を絞める真似をした。

「ジタン! 来たぞ!」

ベアトリクスが駆けてきた。指差す方を見れば、無数の警官隊の
車両がこちらを目掛けてやって来る。世界指名手配犯であるジタン
の面目躍如、と言えるのだろうか。

「そろそろ時間だな。結構楽しかったぜ! 二度と会いたくないけ
どな!」

ジタンはエアリスから受け取ったサークレットをすぼりと頭に載
せ、救命艇へ走り出した。

「それでは、私も失礼する」

ベアトリクスが踵を返そうとする。するとクラウドが声を掛けた。

「うおのれえ！！　またしても逃げおつたかあ！」

クラウドたちのもとへ、縄から脱出したスタイナーが駆けつける。そのすぐ横を、凄まじい数の警官隊車両がジタンたちを追って走り抜けていった。

どうやらスタイナーは、この三人を公務執行妨害だとは考えないらしい。

「あの…。あの今回、私たちを助けてくれたんです」

「そうです。私とエアリスとクラウドがここに居るの、彼のお陰なんです」

「ああ。あいつは何も盗んじやいないぜ」

三人は口を揃えていった。スタイナーが真顔で振り向く。

「いえ、奴はとんでもない物を盗みました」

何かやらかしたのだろうか、顔を見合わせる三人。次の言葉を待つ。

スタイナーはエアリスとティファの二名を見つめ、言った。

「…あなた方の心です！」

『はい？』

「むっ！ いかん、遅れを取ってしまう！ それでは本官は失礼しますッ！！」

スタイナーはやって来た一台の車両に乗り込むと、さっさと行ってしまった。残された三人、ただ呆然とその場に立ち尽くすのみ。

「…私たち、あいつに心盗まれたんだ？」

口を開いたのはエアリスだった。

「ふーん、初めて知った」

「はは、まあ無理もないな。スタイナー警部にはそう見えたんじゃないのか？」

呑気に笑うクラウド。不意に、ふたりのマリアが彼を白い眼で見る。「な、何だよ」突然のことで何が何だか判らない。思わず一歩後退してしまった。

「…何よクラウド、あの爽やかな微笑みは！」

「は？」

「私見損なつたあ！クラウドって誰にでも営業スマイル振りまく人だつたんだね」

冷たい視線。たじたじ。

「私にもああいう顔してくれたら、もっと優しくしてあげるのにい！」

「あつ！エアリスずるいつ！」

クラウドの右腕に絡みつくエアリス。左に負けじと絡みつくティファ。

世界最強の優柔不断男クラウド「ストライフは、ただ彼女達の為すがままになる他はない。」

「マ、マリア…劇は終わったんだぞ？」

引きつった笑顔では、大女優ふたりは満足しない。

「ごまかさないでドラクウ」

「唄っちゃおうかな、私」

「…それはちよつと…」

「あゝゝゝっ！ 何！？ また私のこと音痴だつて馬鹿にするのね
ゝゝっ！！」

「わわわ…違うよティファ…」

「ぐす…。クラウド、ティファのことばかり構ってる。どうせ私
なんてどうでもいい女なんだわ…」

「そんなわけないだろエアリス！ わあっ！ 引きずらないでゝゝ
！！」

当初のシナリオとはだいぶかけ離れてしまったが、現在ドラクウ
役のクラウドはヒロインふたりに挟まれて何とも幸せそう（？）で
ある。帰ったら恐らく、ディオの大目玉が待っているのだろうが、
そんなことは今現在問題にはならないだろう。爽やかな早朝の潮風
と、芳醇な原野の香り。それだけが救いだつた。

多大なる犠牲と無駄を被つた劇の第二幕、ようやく終劇となりそ
うである。

ちなみにドン＝コルネオの生死は、やっぱり定かではない。

f i n ?

後編（後書き）

収集がまったくつかねえ……。
でもまあ、パロディはこのくらいでいいのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1960p/>

Aria Di Mezzo Carattere Ver.FF?

2010年11月28日20時14分発行